

令和元年六月十日発行
皇學館論叢第五十二卷第三号 抜刷

座談会・新元号「令和」をめぐって

皇學館大学文学部教授
京都産業大学法学部准教授

大 久

島 禮

信 旦

生 雄

ハノサ三ノ字乃
 狗能共也
 及原ノ天地ト云
 ニ指傳ヨトノ所心ニ
 テハ那重ノ石ヲ數
 レケラレト云ノアツ
 手能ノ此ノ言ハ卷ニ
 通テ云云ト云ノ祥
 ナルヨレ云云

統紀二天平十年
 七月癸酉天化
 云し
 仲文傳ヲ云此年
 ハ此年ノ此ト云
 矣神ニリマニ云

阿米都知能等母爾比佐斯久伊比都夏等許
 能久斯羨多麻志可志家良斯母

右事傳言那珂郡伊知卿兼島人建部牛麻

呂是也

梅花歌三十二首并序

天平二年正月十三日萃于師老之宅申宴會

也于時初春令月氣淑風和梅披鏡前之粉蘭

薰珮後之香加以曙嶺移雲松掛羅勿傾蓋夕

水戸李三宣太宰師大伴卿老トアリ
 ヨミヤフ并序江家并序菅家

コハ右ノ石ノ尺寸ナクハ人ノ云ラキテニカククセシ

梅花歌三十二首并序ト云キ
 リヨリ此歌集ト云フヨリ
 ト云リ云云

宗武帝母壽德公之額

原系

レハノミナラス

而

夕

宋王神女賦塵絲

毅對八封徳

勢冲

得意而忘言
ハハオトケテ加説
ナトスルヲ云

師云ハハキリシ
ト云ガコトシ
古今大々所
タリト云フ
アルモハテ假名
ノ誤也

岫結霧鳥對巖而迷林庭舞新蝶空歸故鴈於

是蓋天坐地促膝飛觴忘言一室之裏開衿煙

霞之外淡然自放快然自足若非翰苑何以攄

情請紀落梅之篇古今夫何異矣宜賦園梅聊

成短詠

武都紀多知波流能吉多良婆可久斯許魯烏

梅乎乎利都都多努之岐乎倍米天貳紀郊

烏梅能波奈伊麻佐家留期等知利須蒙受和

詩意本
古乐有

コノキヌク
塵絲ニタトフ

忘座本

忘

翰
官本

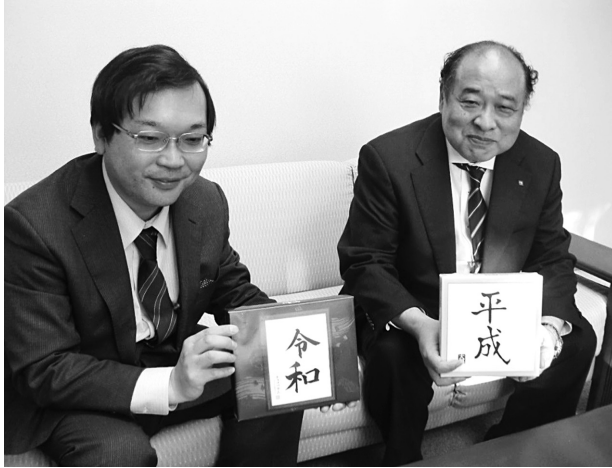
胸襟ヲ開

天
貳紀郊
義官本

義官本

座談会・新元号「令和」をめぐって

皇學館論叢 第五十二卷第三号
令和元年六月十日



皇學館大学文学部教授 大島 信生
京都産業大学法学部准教授 久禮 旦雄

(進行役 遠藤慶太／記録 安垣友貴)

はじめに

—— 先生方、お忙しいなかお集まりありがとうございます。

さて、この五月から新しい元号「令和」が始まりました。「元号を改める政令」では、次のようにあります。

〔元号を改める政令〕

政令第四百四十三号

元号を改める政令

内閣は、元号法（昭和五十四年法律第四十三号）第一項の規定に基づき、この政令を制定する。

元号を令和に改める。

附 則

この政令は、天皇の退位等に関する皇室典範特例法（平成二十九年法律第六十三号）の施行の日（平成三十一年四月三十日）の翌日から施行する。

内閣総理大臣 安倍 晋三

このたびの改元は、崩御ではなく退位（讓位）による改元ですので、事前予想などずいぶん盛り上がりまして、はじめて『万葉集』から年号が選ばれたことにも注目が集まっています。「平成」改元から三十年あまり、新元号につ

いてはテレビや新聞といった報道等がずいぶん力を入れていましたので、みなさんよくご存じだと思います。

とはいいながら、放送でしたら文字通り「放つて送る」で送りっぱなし、書いたもの、記録に残らない憾みがあります。また本誌『皇學館論叢』の編輯をさせていただいている立場からしますと、『皇學館論叢』は皇學館大学文学部の学生が多くの購読者を占めている学術誌ですので、令和の改元をきっかけに「元号とはなにか」について、わたくしどもも含めてあらためて学ぶきっかけが必要ではないかと考えておりました。

そこで本日は『万葉集』や元号(年号とも)に詳しい研究者として大島信生先生、久禮巨雄先生にお集まりいただき、新元号「令和」をめぐる、いろいろとお話をうかがう座談会を企画いたしました。どうぞよろしく願ひいたします。
大島・久禮 よろしく願ひいたします。

—— いまさら他人行儀ではありませんが、おふたかたをご紹介いたします。

大島先生は上代文学・国語学がご専門で、『万葉集の表記と訓詁』(おうふう、二〇〇八年)など、多くのご著書・ご論文があります。新編日本古典文学全集の『日本書紀』(小学館)の刊行にもご尽力になり、萬葉学会、美夫君志会、古事記学会といった学会で委員をつとめておられます。

久禮先生は古代法制史がご専門で、神祇令じしきりょうや延暦儀式帳えんりきぎしきちやうといった古代の祭祀・法制のご研究はもとより、近年は年号制度について積極的にご執筆・ご講演されておられます。東アジア恠異学会の主要メンバーであることも、忘れてはいけません。

『万葉集』、元号ということであれば、おふたかたにお話をうかがうのが一番だと考え、編輯にかこつけて私が知りたい、聞きたいことを大島先生・久禮先生におうかがいする次第です。申し遅れましたが、私は進行役を務めます藤慶太です。そして、記録は皇學館大学の大学院生、安垣友貴さんが担当いたします。

一、新元号発表時の解説に臨んで

—— さて（新元号の）発表が平成三十一年四月一日にごさいまして、わたくしその前日の日曜夕方に洗濯物をたたみながらテレビを点けていましたら、存じあげている方が映っていて、思わず「久禮さんや！」と……。久禮先生がご出演になっていた。あれは「バンキシヤ！」（「真相報道バンキシヤ！」日本テレビ系、日曜一八時～一八時五五分）ですか？
久禮 ああそうですね。

—— それで久禮先生がお話しされているのを見てみると、なんの補足もなく「小島憲之先生が……」なんて解説されていて、これ他の人と違うなあと感じたのです。どれだけの方が分かるかなあと思いつつ、『上代日本文学と中国文学』の小島先生（小島憲之、大阪市立大学名誉教授、上代文学）のお名前をあげて、年号の典拠についてそもそも話をされているのをみて、じわじわ感激がこみあげてきたんです。

えっと大島先生もご覧になっていたとか。

大島 拝見しました、「バンキシヤ！」を。

—— うかがうと、年号関連で久禮先生が出演されたのは、「バンキシヤ！」だけじゃないんですね？

久禮 あの日の早朝に「皇室日記」（日本テレビ系、日曜六時～六時一五分）にも出ていました。

—— ああそうか、（早朝なので）わたしは起きてない。

久禮 同じようなこと喋っているんです。どちらでも小島先生のことには言っているんです。

—— どうもテレビなどは特に「次の年号は何になる？」と、まるで当てものかクイズのように演出して……。

大島 はいはい。

—— 崩御による改元ではありませんから、不謹慎にならず騒げるため、バラエティーに寄った番組製作が多かったのでしょうか。海獣やAIによる予想とか……。そうすると視聴していても「年号とはなにか」については、あまり知識が深まらない。出演者の解説、コメントもどうも的を射ていない。索漠とした思いが残る。もやもやしていたところに久禮先生が、番組を見ている層を全然意識していない直球・本気の解説で……。

久禮 いやいや、ありがとうございます。

—— 「平成」にかわる元号は、どうやら国書（日本で撰述された書物）を典拠にするらしいとの情報が出ていました。「バンキシャー！」の解説では、では国書から年号を選ぶことは過去に検討されていなかったのかと問いかけ、かつて文学の小島憲之さんや歴史の坂本太郎さん（東京大学名誉教授、日本古代史）の議論がありましたよと、久禮先生はわれわれでいうところの「研究史」を示されたのですよね。

多分キャスターの二人（福澤朗・夏目三久）をはじめ、多くの視聴者は「コジマ？」と、ポカーンとしていたと思うのですが、お話しをうかがうと、カットされないような構成に組み立ててお話になったとか。

それで話したなりではもったいないと思う、「ぜひ書いたものを」と、考えたのがこのたびの企画です。ところがしかし、当然のことながら学術論文としてご見解をおまとめになっているようで。それがいただいた「新元号「令和」の来歴と意義」（平成三十一年四月二十九日）ですね。

久禮 これは論文といえるかわかりませんが、公益財団法人モラロジー研究所の道徳科学センターが運営しているデータベースサイト「ミカド文庫」(<http://mikado-bunko.jp/>)に掲載したものです。

「ミカド文庫」に載せたときに、日文研の呉座先生（呉座勇一、国際日本文化研究センター助教、日本中世史）がツイッ

ターで紹介してくれたらしくて……。

—— ああー、じゃあ結構……。

久禮 呉座先生とは、四月一日にNHKの特番で一度ご一緒したのですが、ありがたいことにそちら経由で、たくさんの方が読んでくださっているようです。ここではそれとは重複しないようにお話しをしたいと思いますけれども。

—— いえいえ、座談会ですから。ざつくばらんに良い悪いとか、そんなとこまで踏み込んでお話しただけだと
思います。

雑誌でしたら、たとえばお持ちいただいた『文藝春秋』二〇一九年六月号でも（田崎史郎「安倍官邸」新元号決定」までの全内幕、中西進「令和とは「うるわしき大和」のことです」を掲載）、現在、会議中の佐野真人先生が寄稿された『週刊ポスト』などでも（二〇一九年三月二十二日号）、新年号の予測や新年号決定の内幕については、書かれています。

しかしその前に、「年号ってなに?」「このたびの年号「令和」の意義は?」といった根本の話を、どっかできつちりまとめておく必要だろうと思いませんか?。

久禮 そうですね。全体的にそのあたりの議論が、ちょっとはつたらかされている感じはしますね。

—— だからちようど年号のお仕事有一段落して、次は即位礼なり大嘗祭にの報道に移っていく段階、大島先生が館長をされているここ佐川記念神道博物館でいえば、特別展「即位礼と大嘗祭」の展示を準備されている状況ですから、いまの段階で改元について外連なく振り返っておくことがいいんじゃないのかなと思います、このような無理をお願いした次第でございます。

どうですか?、久禮先生・大島先生、その新年号「令和」には印象はどんな印象をお持ちになりました?。

久禮　じゃあ私から申し上げますと、私は当日、日本テレビの特番が生放送で。

——　ねえ、(生放送は)こわいですね。

久禮　前日に出演の打ち合わせに行ったら、当日発表があったら、すぐ出典を調べて、解説をしてくださって言われたわけですよ。

——　もういやや、絶対そんなん。

久禮　これも裏話的になりますけど、打ち合わせの時に、菅さん(菅義偉内閣官房長官)のあと安倍さん(安倍晋三内閣総理大臣)がというタイムスケジュールを確認しているときに、みんなあれーって考え込んだのは、菅さんは元号だけ言って引つ込む可能性があるのではないかと。新年号だけ発表して、年号の出典は言わんとした場合……。

——　それはたいへん。

久禮　そう。その場合、総理談話まで待つて解説をすべきかどうかで議論があった。一夜明けてみると、菅さんのときに若干喋ることがわかって、代表質問も二つあるということがわかったのです。だからそこで出典を言ってもらえるだろうということになったので、(出典が公表されないまま)解説することはなくなって、まあ良かったですけど。

所先生(所功、公益財団法人モラロジー研究所教授)も私も、こんな(段ボール箱のような大きさ)大きなキャスターに、『日本書紀』とかなんとか全部運んで、漢籍に通じた研究者二人に電話が繋がるようにしといてですね。ところが、いざ発表となると『万葉集』かー! ってなつて。で、僕はもう実家に電話して……。

——　それが出来るのがいいですよ。

久禮　すぐファックスで日テレに資料を送ってもらうように言つて。で小学館(新編日本古典文学全集の『万葉集』)を送ってもらつて、その場で解説をザツとしたつていうところですよ。

—— びっくりされました？

久禮 やっぱりちよつと、「あつ」という感じはあつたんです。私は『日本書紀』か、『懐風藻』(天平勝宝三年(七五二)成立の漢詩文集)とか『文華秀麗集』(弘仁九年(八一八)成立の勅撰漢詩文集)とか、そういうもんだらうと思っ
ていました(いずれも日本古典文学大系に収録、校注者は小島憲之氏)。そういう古代の史書とか漢詩文集のなかで一番出典と
なると困ったなつて思ったのは『経国集』(天長四年(八二七)成立の勅撰漢詩文集)。『経国集』から採られると、『経
集』つて注釈がないんですよ。

—— 『経国集』は最近、「対策」については注釈が刊行されました(津田博幸編『経国集対策注釈』塙書房、二〇一九年)。
全体の注釈は、まだありませんね。

久禮 そうそう。だから『経国集』から採られるとしんどいなと思つていた。

—— それは学生のゼミ発表を彷彿としますね。担当箇所について注釈はあるか?、現代語訳はあるか?、みたいな
久禮 そういう意味でも、結果としては『万葉集』つていうのはよかつたと思います。『経国集』とか『文華秀麗集』つ
て言った場合に、日本漢文の研究者には申し訳ないけれども、みんな「それなんや」つてなるのではないでしょう
か。その点で『万葉集』であれば、「あれね」つていう感じではあつた。その点ではそういうことも考えているのかな
つて感じではありますよね。実際、『文藝春秋』の田崎史郎さんのレポートによれば、安倍総理が『万葉集』なら読
んでみようと思うでしょう」と言つたそうですね。もっとも『懐風藻』だつて読めばいろいろ面白いので、もつと知
れてほしいと思うのですが。

もうひとつは「令」つていうと、僕らは幕末の年号案「令徳」で、徳川幕府と朝廷が揉めたときの話の思い出す
んで……。

*編者注：幕末に「文久」（一八六一）や「元治」（一八六四）が採用された年号選定の場で、「令徳」の年号案が提示されていた。しかし「徳川に命令する」とも読めるため反対意見が出され、採用にはいたらなかった（吉野健一氏の指摘。所功・久禮巨雄・吉野健一「元号 年号から読み解く日本史」文春新書、二〇一八年）。

—— それをバツと思いつけるのがすごいんですけど。

久禮 問題はね、あれをその場ですぐ言っちゃうと、かつて歴史上にあった幕府と朝廷との関係を、現在の安倍さんと皇室の關係に重ね合わせる人が出てくると困るな、と。

—— 学術的な解説が政治的な批判に利用されかねないあやうさがある……。

久禮 そうそう。だから慎重に、どのタイミングで喋ろうと考えていました。多分、吉野健一さん（京都府教育庁文化財保護課、日本近世政治文化史）と所先生がほぼ私と同じタイミングで言ってるんじゃないかなって思いますよ。

だから僕も「令」の字は幕末の年号候補で使われたことがありますね」みたいなことを言つて、そのときに取りまともに動いた松平慶永まつだいらよしのながは、後に「明治」の年号候補を選んでいますよ、と言うくらいにしたんです。だから文字ひとつ取つても、過去の歴史でいうと、使われてはいないけども有名な例だなんて思いました。

ただ、いろいろ過去の例から思うところがあつても、あまり波風を立てないような解説をしないとイケないと思うので、うーんと考え込んだところではありました。けれども、いざ「令和」の発表があつてから二、三日してみると、定着しましたね。

—— あまり違和感なく定着しているとの感想ですか、久禮先生は。

久禮 平成のときはもっとなんか「平成？」っていう人が多かったようです。まあ六十四年（昭和）と三十一年（平成）の違いだとは思んですけど。

—— ちなみにご存知なんですよ、平成に改元のときはリアルタイムで。

久禮 まあその時私は七歳とかですからね。

—— 院生の安垣さんのように、平成改元のときに生まれていない人もいます。

久禮 平成改元の時に比べると、「平成」って書くようになって「昭和」になるとかはなかったのかなという感じがしています。ともかく第一印象は、なによりまず、「どういう風に解説しようかな」というのがまず一番目。

—— ああなるほど。久禮先生の感想は「どう解説しようかな」と、そこなんです。終わってゆく「平成」をしみじみと噛み締めてとかそんな余裕は、

久禮 なかった。

—— まずは。

久禮 解説しよう、っていう。

—— そこがまず一番。なるほど。

二、「令は善なり」

大島 (年号の典拠として) 『万葉集』も噂にはありました。

久禮 ええ、ありました。報道もされましたね。

大島 ありましたよね。

久禮 その噂が流れた後で報道のほうでいろいろ議論があつて、一部で『万葉集』は万葉仮名だから絶対に選ばれ

ない」という意見が出たそうです。その話を聞いたときに、私はそれは違うと思ったんですよ。

—— 万葉仮名から年号を取るのはいらうとの意見は、違うわけですね。

久禮 『万葉集』のなかには漢文があるし、それこそ法制史の立場から言えば、『万葉律令考』という瀧川先生（瀧川政次郎、國學院大學名誉教授、日本法制史）の大著は、ほとんど『万葉集』の漢文の部分だけで法制史的な分析をされています。『万葉集』ってほかの歌集に比べても漢文の部分が多い。そこから（年号を）取れんことはないやろうとは思ったんですね。ただ一方でね、『万葉集』に「これからの時代はこうですよ」みたいな、中国古典に多くあるフレーズはないだろうと思っただけです。だいたい宴会で楽しいとか、あと「貧窮問答歌」。

—— それからはとれないですよね。

久禮 そう、「沈痾自哀文」なら憶良が病気になってしんどいわとかかね。

—— 年号が時代の理想を掲げるものとする、文字列としては引き出せたとしても、典拠や内容で共感できなくなってしまう。

久禮 そういふのがあるから、僕はないんじゃないのと。嵯峨天皇の漢詩についても調べていましたが、嵯峨天皇もどちらかという詩宴での詠作が多いので。

—— そうでしょうね。

久禮 だから（国書を典拠にするならば）『日本書紀』かなっていう気がしたんですけど、でも『日本書紀』とすると「出典論」の問題が出てくる。だから（国書から）どういうふうを選ぶのかなと。国書、特に『日本書紀』からの年号案を提案した坂本先生や小島先生はそのあたりはもちろん分かった上でお考えだったと思うのですが。悩ましいところだったんです。

*編者注：『日本書紀』の「出典論」とは、『日本書紀』の文章が漢籍を典拠にして構成されていることを検討する議論。江戸時代、尾張藩の河村秀根らが『書紀集解』を著わして典拠を追究し、戦後は小島憲之氏によって類書の利用が指摘されるようになった。近年の『日本書紀』の作者論（森博達『日本書紀の謎を解く―述作者は誰か』中公新書、一九九九年など）にもつながる論点。

—— 発表から時間経って、解説のお仕事も一段落されて、どういう感想ですか。ああ良かったなあという感じですか？

久禮 僕のすごく正直なことを言うと、……あのね、ゴチャゴチャ言っても、決まってしまったものはないような感じがヤンかっていうところはあるわけです。

—— ああ、なるほど。

久禮 決定した年号に対して、このあと十年、二十年使っていくときに、その年号を批判的にとらえることは、僕は決して良いことではないと思うんですよ。

学問の実際面として、新たに決定した年号を評価することは、いわば社会的な活動に当たるわけで、それは古典の学問的な注釈や解釈とかと全然ちがう問題なんです。そういう実践面——これから国民が使用していく年号に対してこう、ああだこうだ言って、批判するのは生産的ではないと思うんですよね。

—— はい、はい。

久禮 一部で新年号「令和」を批判する研究者もいますけど、それはどうなんだろうと思います。

学問の実際面からすると、やっぱりそこは良い方向の議論をすべきであって、「出典論」から議論するときでも、あんまりそれを用いて新元号を批判するっていうことは、僕は良くないことだと思うんですよね。例えば森鷗外は

「大正」元号がベトナムの莫朝で使われたことがある、「不調への至り」であると批判していますが、それは友人（賀古鶴所）宛ての手紙で言っているものであって、公表したわけではありません。

—— ああ、なるほど、なるほど。

久禮 いろいろな経緯があるとしても、国民全体が「良い元号だな」と思えるような良い解釈をした方がいいと思うんです。もし不満があるんだったら、森鷗外みたいに、友人に手紙で書くなり、政府に意見書を提出するなりして、十年、二十年経ってから、自分が死んだ後に公開すればいい話ではないですか。ですから私は批判的なことは言わないようにしようと思いました。

ところが報道機関によつては取材ですごく「命令」の「令」にこだわるところもありましたね。

—— ああそうか。記者の方がほしいコメントに誘導するというか……。

久禮 今までの元号との大きな違いはどこですかとか、そういう新しさとか違いとか、あとは「命令」の「令」とか、マスコミによつてはそういう点をちよつと強調するところがあつたんです。「ワイド！スクランブル」（大下谷子ワイド！スクランブル）、テレビ朝日系、平日一〇時二五分～一二時）に出たときもコメントーターの方からそういうことを聞かれました。

—— 「ワイド！スクランブル」も出られたのですか。

久禮 二回ほど出ました。最初の依頼は学問的で、醍醐天皇や足利義満と改元の話とかをパネルでやってくださいました。むこうから言ってきた当初の依頼では「村上天皇の話をしてください」と。村上天皇の御前で三善清行の孫と賀茂保憲が改元するかどうか議論して、それを天皇が日記に書かれているんですね（『応和四年革命勸文』所引「村上天皇御記」 応和四年六月十八日条）。でも村上天皇の話は甲子革命（かっしかくめい）（干支が「甲子」の年は変革が起きるとされているので、あらか

じめ改元してしまうこと」の話で、「ややこしいからやめた方がいい」って言って、「醍醐天皇が自分で年号「延長」を決めた話にした方がいいですよ」って提案すると、採用されました。

もうひとつの依頼は、「一番たくさん年号選んだ人は誰ですか？」って。もうそれは「森本角藏先生の『日本年号大観』（目黒書院）の該当部分を送るから、そちらで数えてください」って言って。

—— 数えろって（笑）。

久禮 そっちはマン・パワーがあるんだから数えてくださいって言って。そうしたらスタッフで数えたのかな、菅原為長（保元三年（一一五八）—寛元四年（一二四六））だった。八回採用されています。

—— いつぐらいの人ですか？

久禮 これは鎌倉時代の人で、文章博士。

—— 鎌倉期の儒者なんだ。

久禮 そうそう、九条道家の家司だった人です。しかも北条政子にも学問的な指導をしている人で、京都の朝廷にも鎌倉の幕府にも顔が利く。九十歳くらいまで生きてるんですよ（享年八九歳）、あの時代で。

—— ああ、やっぱりね。田中先生（田中卓、皇學館大学元学長、日本古代史）がいつもおっしゃっていた、「学者は長生きしないとイケない」というのは、あるんでしょね。

久禮 菅原為長は正二位、参議ぐらいまでなっているのですね。

—— 学者として達せるところまで行った。

久禮 そうです。どうも調べると、それ以前は大江氏とか藤原南家のほうが多い時期もあったのですが、菅原為長以降、菅原氏が年号を選ぶという慣例が確立した形跡がある。こういうことが結果的に「ワイド！スクランブル」の取

材で分かってきました。

—— テレビの取材がきっかけで、学問的にも生産的なことがあった。

久禮 だからテレビも馬鹿にできないわけですよ、素直な質問をぶつけてきて、普段我々がいちいちやらないことを調べてくれる。それで、二回目に出演したときは、もう「令和」に決まった後だったんですけど、コメントーターの方が、「令和の「令」は命令の「令」ですよ」みたいなことを聞いてきたわけですよ。

—— でも、「令は善なり」と漢籍にあるわけで……。

久禮 その時はそこまで言わなかったけれども。「令和」を議論する際に、みんな命令の「令」の意味として、白川静先生の『字通』（平凡社、一九九六年初版）ばかりひいてくるんですよ。……いやあそうやけど（苦笑）。

—— 漢字にはいろんな意味がある。その語にふさわしい意味をきちんと理解して挙げないと、キリがないですよ。
久禮 白川先生（白川静、立命館大学名誉教授、漢字学）の解釈って、近代以降に発見された甲骨文字や金文を踏まえたものなわけで、その漢字学の解釈が正しかったとしても、その解釈を（『万葉集』に掲載された歌が詠まれた）七世紀の日本人が受け継いでいるはずがないのだから。

—— そうそう、その通り。

久禮 たとえそれが正しくても、殷代の漢字の意味というのはね、もうみんな忘れていきますから、そんなん。

—— 辞書の使い方について、専門的なトレーニングを受けていないのでしょうか。

久禮 昔、皇學館で山田孝雄先生がされていた『令義解』^{りょうぎげ}序の輪読会あるじゃないですか。

—— また、よくご存知ですね。

* 編者注：戦時中に神宮皇學館大學でおこなわれた令の共同研究。この研究会の記録「令共同研究会記録」は、荊木美行『令義

解の受容と研究』（汲古書院、二〇一〇年）に翻刻を掲載。

久禮 あのなかで、漢字の解釈するときに、当時、殷墟いんきょ（河南省安陽市、一九二八年から発掘された殷（商）の都）の発掘に注目が集まっていた段階で、甲骨文字の解釈を入れるか入れないかという議論になって、天長十年（八三三）に撰進された『令義解』の序文を解釈するのに、平安時代の人が知らなかった甲骨にまで遡る必要はあんまりないじゃないですか、となった。

—— ないと思います。

久禮 私もその通りだと思うわけで。白川先生ご自身も、文字の意味や性格は時代によって変わっていくもので、文字の本来の意味が、通用している意味と異なることがあるというのを、「平成」改元の時に書かれています（白川静「新元号雑感」同「文字遊心」平凡社ライブラリー）。現代の漢字研究の成果は大事ですけども、古典を解釈するときには、そこまでこだわる必要はなくて、むしろ古典が成立した同時代の人が使っていた書物では、なんて書いてあるのかが重要だと思います。

—— 同時代とは？。『万葉集』なら、『万葉集』の……。

久禮 『万葉集』なら『万葉集』の歌を詠んだ人、歌集にまとめた人が読んでいた漢籍はなにかというと、それは『字通』ではなくて、『広韻』くわいん（一〇〇八年に増修された韻書、唐代の中古音の復原に用いられた）であるとか、それこそ『爾雅』じが（中国最古の辞書、日本では大宝令では大学寮の教科書に指定されていた）とかになるはずじゃないですか。そして『爾雅』には「令は善なり」と書いてある。その意味を今回はとるべきだと思います。

—— 旅人も家持も白川静は読めない。

久禮 読めないから、あんまり遡ってその意味について云々するということは、果たしていいことなのかどうかって

いうね。まあ、たとえばちょっと気の利いたことをコメントしようとするときに、あの漢字の原義は…とかいうのはいいですよ。

—— こじつけのネタね。

久禮 でもそれは果たして、国とか時代とかを象徴する年号の意味や出典を議論するときに意味があるか。漢字の成り立ちを甲骨や金文まで遡って議論するとなると、なかにはぶっそうなものもある。我々が今日、「道」という字を使うときに、白川先生が言っていたように〈敵の首を持って歩いている人〉とか、考えないでしょう。

—— 考えないですね。

久禮 そういうことまで考えて議論するのは、生産的じゃない気がするんですね。話を戻しますが、そのコメントーターの方は、「令」という字が命令の令ということを強調しておっしゃっていたんで、私はそれに対して、「まあでも、やっぱり命令の令、「のり」っていうのは告げ知らせることで、その場合、言ったことを聞いてもらわなければ意味がないですから」と、そのことまで含めて議論すべきじゃないですかと言ったんです。また一方で、別のコメントーターの方は出典とか意味を議論するのはオールドメディアだけで、国民はそんなことを気にしていない。政府もそっちを向いていると言われて、それはそれで極論だなと思いましたがこれも。

いまでも「令」という字を命令の令だと強調する人は多い。でも、中西先生（中西進、高志の国文学館館長、奈良県立万葉文化館名誉館長、日本文学。年号「令和」の考案者と報道されている）は『爾雅』とはおっしゃらないんですけど、「令は善なり」と板書で書いている写真が『週刊文春』などに掲載されているのですから、その意味であることは確実にしよう。

—— 板書で書いてらっしゃる写真が。

久禮 今度の『文藝春秋』のインタビューでも、「『令は善なり』って辞書に書いてます」と発言されています。でもその辞書が『爾雅』だと言っていた良かったです。

まあ『大漢和』（諸橋轍次『大漢和辞典』）を引けば載っているわけですし、私もそういう先人の業績をもとに話しているわけですが、そういうものも見ないで発言されているのかな、ということが多くて、ちょっと問題かなっていう気はしました。そういうことを含めてゴタゴタありました。

三、万葉集研究者の反応

—— 踏み込んだところまでお話しただいています。さて、大島先生はいかがですか。

大島 そうですね、この令和っていうのはね、「令」はうるわしい、大変うるわしい名だと思います。『万葉集』は和歌集ではあるけれども、漢文の部分もありますので。特にこの「梅花の歌の三十二首并せて序」から採ったと聞いて、なるほど、と。

—— やっぱり「なるほど」、と。

大島 ええ。ここからとったのかという、ある意味感心したようなことですね。まあ、あの、私、「大宰府万葉会」の松尾セイ子さんと……。

久禮 あの、テレビに最近出られている。

大島 ええ。「大宰府万葉会」、「万葉集」の講座や歌碑めぐりをしているボランティア団体で、会長が松尾セイ子さんという方です。私は一月に講座をしたところだったんですよ、その大宰府で。

—— 今年の一月？。では、まだ（新元号が）わかっていない段階ですか？

大島 ええ。

—— ちなみに講座の内容は、この歌（梅花の歌）ではないんですか？

大島 まあ、この歌ではないということ。

—— ほんとうは先生、ご存知ではなかったんですか？。

大島 いえいえ、全然別の歌でやったんですけれどね。その、松尾さんがテレビに出ておられるのを見て、こつちまで嬉しくなりました。

—— 『万葉集』というと、ファンの人はファンですけども、一般の人までね、なかなか興味を持ってもらえない。

—— ええ、そうですか？

大島 そこまでの人気はなかったんじゃないかなと思うんですが。でも今回書店とかで、平積み。

—— 帯だけ新しくつけてね、上手に。「こんな本、いつ出たのかな？」と思ったら、「あつ知ってる！」って。

久禮 中西万葉（中西進『万葉集 全訳注原文付』一〜四、講談社文庫）が結構再編されたっていう。

大島 ええ。そうですよね。『万葉集』が認知されたのは嬉しく思います。私、万葉文化館友の会という、その理事もやっていたんですが、それもいろんな事情で友の会が解散に三月十七日になりました。

—— ああ、タイムングが悪い。もうすこし待ってれば……。

大島 里中満智子さん（大阪芸術大学教授、漫画家）が最後に歌碑を作られて（県立万葉文化館駐車場、二〇一九年三月十七日除幕式）、それで解散になったのですけど、もしかしたら、友の会存続していたんじゃないかなって。

（新年号の出典が『万葉集』であるのは）万葉文化館にとっては朗報です。五月になってちょっと訪ねたときはすごい

人でした。まあゴールデンウィークっていうのもありましたけどね。そういう文化館とか、万葉関係にとつては本当に嬉しいことで、また、これによって国文学に関心が集まればよいと思います。

—— ひろくいえば人文学ですね。しかし人文学でこんなにテレビを賑わすって、あんまりないことですよ。

大島 ええ。だから本当に、四月一日も明治大学の山崎健司さん、あの方が解説でNHKに出ておられたようです。

—— この件、じつは私ちよつと関係しているんです。NHKの記者から連絡、やりとりがあつて「もし新年号の出版が『日本書紀』だったときは、コメントできるように待機しておいて下さい」と言われていました。それでフタを開ければ『万葉集』ですから、お役御免。でも電話はかかつてきて、お礼を言われるんです。「えらい律儀やなあ」と感心していたら、「ひとつお願いが、『万葉集』の先生を紹介して下さい」「いますぐスタジオ入りできる都内の方を」と、それが本題。それで何人かに相談して山崎健司さんのお名前を挙げたんです。……家族が明治大学文学部に勤務しているもので。結局、勤務校を通じて出演依頼をお受けになったそうです。

久禮 ちょうど私と入れ替わりで入ったはずですよ。五時入りとかで。

—— そうそう、「シブ5時」(ニュースシブ5時)、平日一六時五五分〜一八時一〇分)。

久禮 当日になって『万葉集』研究者を集めたということでしょうか。

—— NHKはそうだったみたいで。発表後に『万葉集』の先生を探しだして、アプローチしたようです。それで先に連絡がついたのが山崎先生だったと聞いています。

大島 その番組は見てなかったのですが……。ほんとに国文学について、テレビなんかで『万葉集』ってね、教養番組以外で聞くことないですね。

—— そうですね。

久禮 今回の元号に関する選者では、『万葉集』の中西進先生のほかに、石川忠久先生（二松学舎大学名誉教授、中国文学）と池田温先生（池田温 東京大学名誉教授、中国史）のお名前があがっていましたね。池田温先生のお名前を全国放送のお昼の番組で聞くとは思ってなかったですよ。それこそ小島憲之先生にしても、研究者は知っているけど、一般の読書人が知っているかというぐらいで。

大島 「小島憲之」って名前をテレビで聞いてね、ほんとに。

—— どうですか、先生の周りの研究者の方はどんな感じですか。

大島 そうですね、実は明日（二〇一九年五月十一日）萬葉学会の行事があるので、そこでみんな色々おっしゃると思うんですけど。でもまあ、みなさん冷静ですから。

久禮 ちょっとなんかね、そういうブームに乗ると恥ずかしいみたいなどこ、研究者は若干あるんですね。

—— 私たちそういうもんですね。

久禮 「私は騒ぎになるずっと前から『万葉集』好きでしたから」みたいな。インディーズのバンドが突然売れてしまった時のファンみたいなどころですよ。

—— （笑）。では、国文の学会などでは特に企画などはないのですか？。

大島 明後日（五月十二日）の美夫君志会万葉講演会で、上野誠氏（上野誠、奈良大学教授、上代文学）が憶良についての講演（演題「大愚・山上憶良―愚者の系譜―」）をすることになっています。前から決まっていたことなんですけど。関心のある方が多く来場されるのではないかと期待しています。

久禮 歴史の方はちょっと、代替わりの儀礼の方に集中しちゃってるんじゃないかと思えます。

—— そうですね。またね、久禮先生はまあ違うけれども、歴史の人はスタジオに喚ばれても『万葉集』についてあ

んまりコメントできなかったでしょう?。

久禮 年号の人(年号について専門的に研究している歴史研究者)、あんまりいませんでね。

—— そうでしょ。『日本書紀』か『古事記』かと思つて喚び集められている人に、「さあ『万葉集』についてコメントしてください」は、ちよつとしんどい。四月一日に東京の家族が各局の番組をそれ見ていて、知つている歴史研究者が出演しているんだけど、うまくコメントできなくて、「もう、なんか気の毒だ」と言っていました。

久禮 中国文学や日本語学の先生がそれぞれコメントされていましたが、ちよつとお気の毒でしたけどね。

—— そこでどういう先生をお喚びできるかで、記者なり放送局なりの力量・見識がみえると思いますね。

大島 なんかね、『万葉集』の歌は全部万葉仮名で書いているみたいに思われると、それはそれで誤解なんですよ。久禮 そうそう。

—— これは、日本の年号をはじめて国書から選ぶ意味、はじめて『万葉集』から選ぶ意味と関わつてくると思いますが、「全部万葉仮名で書いている」つて、そんな反応される方がいるんですか?

大島 いや、だから(年号は)和歌からは取られないだろうという予測は、万葉仮名で書いてあるから、そこから意味のある二文字は取りにくいっていう前提だったのでしょう。けれども、いわゆる訓字表記のところがありませんか、二文字を取つて音読みにしたら、できなくはない。

—— 歌から(年号を)取れないこともない、と。

大島 とは思つてましたけどね。

久禮 なるほどね。

大島 そういうことはね、「令和」に決まる前から思っていました。今で言えば、訓み下し文から二文字選んでもい

いようなね、極端な話。まあそんなことも思ったりもしますが、だから『万葉集』は、すべて万葉仮名で書いてあるって、みんな思っておられるのはちよつと……。

久禮 多様な表記が混じっていると。もうちよつと言われても良かったのかもしれないね。

四、万葉集「梅花の歌三十二首并せて序」について

—— 発表のあった平成三十一年四月一日の内閣官房長官、内閣総理大臣の会見は次のようなものでした（首相官邸ホームページ：https://this.kijis.jp/467012405365654625）。

〔内閣官房長官記者会見〕菅官房長官 平成三十一年（二〇一九）四月一日

先ほど、閣議で元号を改める政令及び元号の読み方に関する内閣告示が閣議決定をされました。新しい元号は「令和」であります。

この新元号については、本日、元号に関する懇談会と衆議院及び参議院の議長及び副議長の御意見を伺い、全閣僚において協議の上、閣議において決定したものであります。新元号の典拠について申し上げます。「令和」は万葉集の梅の花の歌、三十二首の序文にある、「初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薫す」から引用したものであります。この新元号に込められた意義や国民の皆さんへのメッセージについては、この後、安倍総理の会見があります。

座談会・新元号「令和」をめぐる（大島・久禮）

〔内閣総理大臣記者会見〕安倍総理 平成三十一年（二〇一九）四月一日

「万葉集」は、1200年余り前に編さんされた日本最古の歌集であるとともに、天皇や皇族、貴族だけでなく、防人さきもりや農民まで、幅広い階層の人々が詠んだ歌が収められ、我が国の豊かな国民文化と長い伝統を象徴する国書であります。

悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄をしつかりと次の時代へと引き継いでいく。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいとの願いを込め、「令和」に決意いたしました。

文化を育み、自然の美しさをめぐることができる平和な日々にかかる感謝の念を抱きながら、希望に満ちあふれた新しい時代を国民の皆様と共に切り開いていく。新元号の決定に当たり、その決意を新たにしております。

大島 （「令和」の典拠となった「梅花の歌三十二首」は）たまたま巻五のそういうところ。歌そのものは基本的に万葉仮名で書いてるんですけどね。

久禮 漢文が多い印象がありますね。巻五って。

——— そうです、漢文脈の多い巻です。

久禮 だから伊藤博先生（筑波大学名誉教授、上代文学）は、一体でひとつの文学表現と考えるべきだとされているんです（伊藤博『萬葉のあゆみ』塙新書）。和漢（万葉仮名の和歌と序の漢文）で一体だと。

大島 だから本当に、巻五のあそこの部分だけ抜き出すんじゃないなくて、実はその三十二首の世界までね。

—— 先生、ぜひご解説いただけますか。

大島 では、せっかくですから（資料配布）。

—— 新編全集ですね。

〔万葉集〕 卷第五 新編日本古典文学全集本（小学館）

梅花の歌三十二首 并せて序

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴会を申べたり。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ちられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空には故雁帰る。ここに、天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。

もし翰苑にあらざば、何を以てか情を據べむ。請はくは落梅の篇を紀せ、古と今と夫れ何か異ならむ。園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

大島 参考に付けたのは、大久保広行さん（都留文科大名誉教授、上代文学）が書かれたご論文（「梅花の歌三十二首」ですね。『セミナー万葉の歌人と作品』（神野志隆光、坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品』第四巻、和泉書院）から取っています。

この三十二首の序文ですね。今回、「令和」が採られたのは、最初の「時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ」

座談会・新元号「令和」をめぐる（大島・久禮）

という部分です。これはもとが漢文ですから、やっぱり注釈書によって訓み下し方がそれぞれ違う。いろいろな報道で訓が違っていたりとか。

—— ああ、なるほど。

大島 「和らぎ、」で、「」になってたような。

—— なるほど。

大島 そして「蘭亭序」の影響が……。

—— この序文の典拠が王羲之の「蘭亭序」の影響があるとの指摘は、契沖が最初に言って……。

大島 そうですね。そういう世界観を受け継いでいると言いますかね。だけど、それを真似したとか、そういうことではない。

—— ここ、大事なところですよ。

大島 （蘭亭序や帰田賦などの中国文学の影響があることは）押さえておかなきゃいけないのかなと思いますけどね。その頃は、たとえば長屋王（前年の神亀六年二月自尽）のところで詩宴が開かれていましたしね。そういう影響もあって、この大宰府の地で詩宴ならぬ、

—— 和歌の宴。

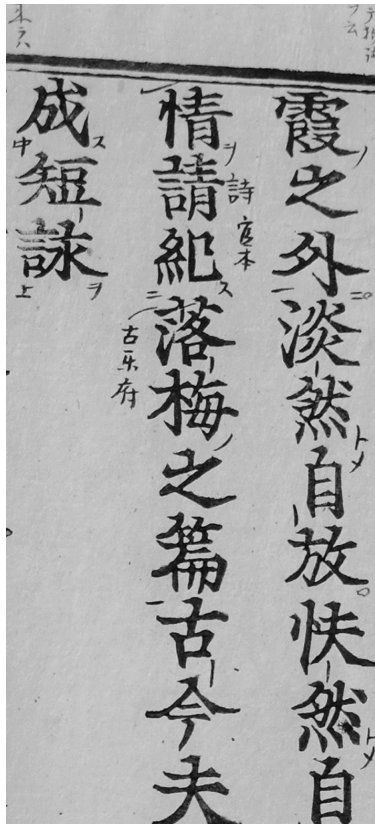
大島 ええ、和歌の宴を開いたのだと思います。

—— 序文は誰が作ったのかは、分からないわけですか。

大島 序文はですね、旅人（大伴旅人）、憶良（山上憶良）、その周辺の人とかいくつか説がありますけど、立場としては、やっぱり旅人ということになると思うんですね。

「立場」とおっしゃいますと？

大島 この、最後のところですけども、「若し翰苑かんえんにあらずは、何を以てか情こころを據たもべむ」と。で次の「請ねがはくは」というところで異同があるんですよね。新編全集の頭注二一にも説明があります。今、これ「請」という字になっていますが、他の古写本は「詩」という字になって。



〔万葉集〕寛永版本での当該箇所、皇學館大学附属図書館澤瀉文庫所蔵本

シ？

久禮 「詩」、ポエムの「詩」ですね。

ああ、なるほど。

大島 「詩」になっている。これは西本願寺本（鎌倉末期書写、新編全集の底本。他に、紀州本、神宮文庫本、温故堂本、

座談会・新元号「令和」をめぐる（大島・久禮）

大矢本、京都大学本など）なんですけど。

—— 諸本の異同ですね。こういう話がいんじやないですか！。

大島 広瀬本（十八世紀書写、非仙覚系の写本。他に、細井本、活字無訓本、活字附訓本、寛永版本など）とかは「請」（「ねがはくは」）になっているんですね。

「請」つてのも一理あって、初唐詩序の影響を受けたたとえば『懷風藻』の下毛野虫麻呂の詩序などでは、「請ふらくは」というくだりがありますので（「五言、秋日長王が宅にして新羅の客を宴す」の序にある「請ふらくは、翰を染め紙を操り……」）、「請」も一理あるということなんです（参考、小島憲之『上代日本文学と中国文学』）。けれども私は、ここでしつくりくるのは「詩」という気はしております。

それで「詩に落梅の篇を紀す」と読んで、「古と今と夫れ何か異ならむ。園梅を賦して聊かに短詠を成すべし」と結んでいます。「園梅を賦して聊かに短詠を成すべし」、これやっぱり命令口調ですよ。

—— なるほど。

大島 だから立場としては旅人（大伴旅人）なんだろうなと。

—— 旅人の立場で序が作られている、と。

大島 すでに言われていること（伊藤博『万葉集釈注』など）ですが、「文責」旅人というんですか。だからやっぱり旅人の立場でということになると思いますし、歌の方もまた、八二二番（大伴旅人、「我が園に梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも」）に「主人」と書いてありますもんね。

久禮・進行役 はい、はい。

大島 だからこれ、主催者、宴の主催者ってことじゃなからうかと思うんですね。

—— この「梅」（「梅は鏡前の粉を披き」）は、最初うかがったとき紅梅かなと思っただけですが、違うんですね。白梅、おしろいだから白梅なんですね。

久禮 そうですね。

大島 『万葉集』ではほとんど白梅ですね。

久禮 これも、訳によっては鏡の前のおしろいのような艶やかさでとか訳しているテレビ局がありましたけどね。それだと意味が通じないから、そうではない。この「蘭」（蘭は珮後の香を薫す）も、園芸品種の蘭（Orchidaceae）ではないんですね。

—— 匂い草。

久禮 そう、匂い草ですからね。「これは藤袴（Eupatorium japonicum）じゃないんですか」っていうのを、KBS（京都放送、「守ろう！藤袴プロジェクト」を展開）が質問してきましたね。

—— それ、季節がまちまちなってくるけど、どうなんですか。

久禮 そうそう、季節が合わないので、残念ながらそれは違いますと答えました。ここの「蘭」は特定の植物のことではないんですね、多分。香りの良い花ということですよ。

大島 ここも色々調べてみますと、説があるみたいですね、「蘭」のところ。『懐風藻』にも所々、蘭が出てきたように思いましたね。梅と蘭、そういう組み合わせが考えられるんじゃないかなと思います。

久禮 梅というのは、『万葉集』ではあまり匂いを評価しないんじゃないかなかったですかね。見るものが梅で、匂うものは蘭が宛てられている。

—— だから対句対句になるんだ。



(梅、
藤袴)

大島 『懐風藻』で旅人の「梅雪ばいせつ残岸ざんがんに乱れ、煙霞えんか早春そうしゅんに接く」(大伴旅人「五言。初春侍宴。一首」とかね。

久禮 ああー。

大島 やつぱり梅への関心があつて、長屋王の漢詩でみると、「玄圃げんぼ、梅已すでに故り、紫庭してい桃新あたらならむとす。柳糸りゅうし歌曲かきまに入り、蘭香らんかう舞巾ぶきんに染む」(長屋王「五言。元日宴。応詔。一首」と出てきます。

—— あつ蘭、梅と蘭だ。

大島 そういうのを詩の世界と言いますか、やつぱり受け継いで、影響を受けながら世界(梅花の歌三十二首の世界)を創っているんですよ。だから、そのあとの描写も本当に幻想的なのか、世界を表しているようなところがありますから。

旅人というと、あとは妻が大変梅が好きだったというので。

—— 大伴旅人の奥さんが。

久禮 都を出るときに(梅を)植えていった。

大島 そうですね。

久禮 奥さんが大宰府で亡くなって帰ってきて、植えた梅を見てっていうのがあつたはずなんですけど……。

大島 ええ、巻第三の四五三番ですかね。

吾妹子が 植えし梅の木 見ることこころむせつつ 涙し流る

それが(梅花の歌三十二首の)念頭にあつたかどうか、この状況にはふさわしくないかもしれませんが。ともかく梅っていうのは旅人も好きだったんじゃないかなと思います。すみません、とりとめもない。

—— いえいえ。先生におうかがいしたいのですが、今回、日本の古典から年号を選ぶというので、『万葉集』とな

りました。その「梅花の歌三十二首并せて序」が詠まれた場合は天平期の大宰府ですよ。いまも福岡がそうですがアジアに開かれた国際都市。そこで詠まれた外来の植物、梅。…私なんかは、エキゾチックな、バタ臭いような雰囲気、漢詩もわかる貴族達が和歌を詠んでいる状況をイメージするのですが、どうですか。そのような理解は間違っていますか？。

— というのは、報道とかで典拠となった『万葉集』から日本の詩歌の側面が強調されるんですけど、『万葉集』を読むとほんとうだろうか？、それは決めつけになりませんか、という違和感なんですけど、…。

大島 序の最後に「園梅を賦ふして聊いささかに短詠を成すべし」とあって、この「短詠」は短歌なので、当然、こういう方々は、漢詩も作れる人達だろうと思うんですけど、あえてやっぱりここは和歌。

— そうなんです。

大島 漢詩も当然詠めるし、三十二首の作者のうち紀男人も『懐風藻』に名前があつたと思うんですよ。

久禮 「短詠」というのは、歌ではないんですか？。これは解釈によつては、「若し翰苑かんえんにあらざは、何を以てか情を據のべむ」は、漢文ではなくて和歌じゃないとわからないよ、との意味でとっている解釈もあるんですけど。そうじゃなくて、これは単に文章表現・文筆一般のことなのか。どうなんでしょう。

大島 そうですか。この「翰苑」は、詩文、文筆くらいじゃないでしょうかね。

久禮 短詠を和歌と解釈することも可能ですよ。

大島 そうなると思うんですよ。さっきの『懐風藻』の下毛野虫麻呂の詩序では、「請みかふらくは翰そを染そめ、紙かみを操とり」とのくだりがあります。「翰」の字が。

— 詩序のなかにあるわけですね。

大島 こういう流れでいったら、最後、漢詩を作れとなりそうところが、そこはあえて和歌ということだろうと思います。

—— 漢詩的なことは序に委ねられているということですか。

大島 そういうことですね。

久禮 わざとそういう非常に中国的なことを言って、最後であえて和歌を作っているところが、巻第五のいわゆる筑紫歌壇のなあり方だと思ふんですよね。国際的な、エキゾチックなもので、かえって日本的なものが強調されているみたいな。

—— なるほどねえ。

久禮 いわゆる「国風暗黒時代」（勅撰漢詩文集が撰述された時代、平安前期）に、漢文隆盛のなかで日本語表現が巧みになっていったと言われるわけですけれど、これが、そういうものの、いわば端緒と言えるのかなという感じがしますね。

—— やはり年号「令和」は、非常にバランスの良いところから採られたということが、お二人のお話で分かってきました。

久禮 先生、ちょっとお尋ねしたいのですが（梅花の歌三十二首の作者たちは）本当に大宰府での宴に集まっているんでしょうか。集まっていないという説ありますよね。和歌を集めただけっていう。

—— バーチャルな。

久禮 バーチャルな。集めただけっていうのは、旅人の「我が園に」（八二二番）に対して、旅人じゃない人もなんか「我がやどの」とか詠んでいる（「我がやどの」大典史氏大原・八二六番）。だからこれは、決して眼前で梅の花を見て、さあ歌を詠めじゃない。各地で詠んだ歌が集められた仮想の宴ではないかという説もあるのですね。八四二番の

我がやどの 梅の下枝に 遊びつつ うぐひす鳴くも 散らまく惜しみ

これなんか、作者は薩摩目高氏海人。薩摩国から大宰府まで来るの大変やろなとか。

—— なるほどね。でも集まってるんちゃうんかな。

久禮 集まっていないとなるとちよつとね、坂本八幡宮の人たちは困っちゃいますからね。ただ、そういうバーチャルな空間で、集めて配列したのではないかっていう説もあるんです。でもどうなんでしょう。大伴旅人が在任している大宰帥は結構力持ってるから、言ったら来たと思うんですけどね。「忙しいから無理です」とか、言わないと思うけれども。むしろ薩摩国まで都から派遣されて、大宰府に行ったら都の人たちに会えると思つてうれしかったかもしれない。

—— 天平二年（七三〇）正月十三日でしょう。だから中央で行なわれる朝賀のような行事を、九州を統括する大宰府でやっていて、みんな出張で来ているついでに、帥殿を囲んで文学の宴という風に……。

久禮 「我がやど」とか「妹が家に」とかも、本当に彼らの家の梅ではなくて、この梅から連想される言葉として、自分の家の梅を詠んだものが出てくると考えたほうがよいのでしょうかね。

—— 参加者のみなさんは共有しているんじゃないかな。これは。やっぱり色々説があるんですね。

大島 あの、八一八番とかなら、これ憶良の歌です。

春されば まづ咲くやどの 梅の花 ひとり見つつや 春日暮らさむ

—— 「ひとり」？、宴ですよ。

久禮 文学的表現。

大島 文学的表現ですね。

久禮 それこそね、テレビ番組で「ブレバト!!!」（「ブレバト!!!」、毎日放送製作、木曜一九時〜二〇時）ってやってるじゃないですか。

—— 「ブレバト!!!」？

久禮 芸能人に俳句をつくらせて

—— あー、採点するやつね。

久禮 あれでも、題と写真が出されるけど、その写真にみんなこだわってないんですよ。

そこからイメージを上げることが重視されているんですね。これ（梅花の歌三十二首）についてもブレバト的な発想かなと。結局、そこからイメージを上げて詠んでっていう、だから「写實的にこの梅を詠め」じゃなくて、題として梅を与えているのですね。

—— 題詠として。

久禮 題詠として。だから、別に、本当に梅がなくても良いんですよ。梅という題を与えて、さあ詠みなさいですけど、まあ實際宴の席にありますっていうことでしょうね。

大島 ですから八二三番で旅人が

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも

と詠んだ後に、この大監伴氏百代（大伴百代）という人が

梅の花 散らくはいづく しかすがに この城きの山に 雪は降りつつ

と詠んでいる。これを解釈すると、梅は全然散っていないように取れるんですけど、でもさつき久禮先生がおっしゃったような、そんな約束・条件で世界を演出していることで良いんじゃないですかね。

久禮 なるほど。ところでこの宴が行われたとされる坂本八幡宮（大伴旅人宅の候補地のひとつ）は今大変賑わっているようで。あそこで御朱印を貰おうっていう人がたくさん来て。「旅人」っていうバスも出ているそうです。

大島 「旅人号」ね。

久禮 （新年号の発表のあった）翌日の報道だと、氏子さんが泣いてはったんですね。

—— 喜んで？

久禮 喜んでいらして。こんなに人が集まるのがなかったって。ところが五月一日に行くと、行列の整理とかで数時間しか寝てないって。若干疲労を覚えてらっしゃるところが……。

—— またそれをね、報道するから。それで古代の大宰府の仕組みとか、大伴旅人が就いていた大宰帥の職掌とか、誰か説明するのかと思えば、それは全然言わない。学術的なことは言わない。まあいいんですけど。

久禮 これも「ワイド！スクランブル」で、あそこ（坂本八幡宮）にあるって言っちゃったんですけど、実際にはあそこではないという説もあるんですね。発掘してもこれといったものは出なかったって西谷正さん（西谷正、九州大学名誉教授、日本考古学）が書いていらっしやるんですね（西谷正「大宰府研究の現在―万葉集と考古学―」『上代文学』一〇七、二〇二一年一月）。

—— つらいなあ。

久禮 だからこれも学問の社会的な影響でいうと、否定することは簡単だけど、あそこにあるって思ってたみんなで維持してきた、そのこと自体が大事だから、あんまりそれを否定するのもよくないなと思って。

—— やりがちなんですよ、特にわたしのような、ちょっと心がひねっていて歴史を勉強している者は、「本当は違うんですよ」って言いかねないんだけど、ひと呼吸考えたうえで、一般の人に歴史とか文学に関心を持ってもらう扉

を開く。久禮先生が最初におしゃっていたその姿勢は大事だと、今になれば思います。

久禮 あれは小字名なんですよ。あそこに内裏という小字があるらしい。そこから来ているっていうのがあって。だからあんまり言わん方が良いけど、かと言って嘘をいうことでもないんで。だからテレビでは「伝」旅人邸と言っているんですね。

—— それで良いんじゃないでしょうか。大宰府で梅花の宴をやっているのは確かですし、きつと「帥老の宅」はあったでしょうから。

五、漢籍と年号

—— 話を今回の年号にほうに進めますけれども、選ばれなかった年号案について、これは久禮先生がもう書いてらっしゃいます。(未採用年号)は典拠も分かっているんですね。

久禮 ある程度分かっています。

「久化」「万保」「万和」「英弘」「広至」、そして「令和」が有識者懇談会と閣議で示されたわけですが、各社の報道によれば、(ア)「久化」「万保」「万和」が漢籍を出典とするもの、(イ)「英弘」「広至」「令和」は国書を出典とするものに分かれるようです。そして(ア)はかつて提出されたことのある未採用年号です。森本先生の『日本年号大観』(目黒書店)によれば「久化」は一回、「万保」は八回、「万和」は十四回候補となっています。一方、国書に基づく「英弘」「広至」「令和」は今までにない案ですが、使われたことのある文字(弘・至・和)と、使われたことのない文字(英・広・令)を組み合わせるといふかたちで、「昭和」「平成」の伝統をくんでいることが読み取れます。

その出典ですが、漢籍を出典とするものは、これも森本先生のご研究によれば、過去に提出されたものは、そのたびごとに出典が違います。ですから私も『日本経済新聞』でのコメントや「ミカド文庫」掲載のエッセイでは、その一部を紹介したわけですが、その後の報道によれば、「久化」は『易経』、「万和」は『史記』の「五帝本紀」、「万保」は『詩経』とされています。

それをもとに改めて森本先生の本や、報道の際の研究者のコメントなどを参照しますと、「久化」は、『易経』（第三十二卦・恒・雷風恒・震上巽下）に「聖人は其の道に久しくして天下化成す。」とあるのが出典でしょう。「万保」は『詩経』（毛詩、小雅・瞻彼洛矣）の「君子万年、其の家邦を保つ」、「万和」は『史記』「五帝本紀」にみえる「万国和ぐ、而して鬼神・山川の封禪は与して多なりと為す」から採られたと思われれます。いずれも、出典となる古典は、漢籍の中でもしばしば年号の出典となってきたオーソドックスなものです。

一方、日本の古典からとられたものについては、「英弘」は『古事記』、「広至」は『日本書紀』と『続日本紀』、そして「令和」は『万葉集』とされています。

「英弘」は、太安万侶によるとされる『古事記』の序文に天武天皇の業績をたたえ、「英風を敷き、以て国に弘む、即ちすぐれた教化が国に広がっていると記した部分から、また「広至」は、『日本書紀』欽明天皇三十一年四月乙酉条に、漂流民を助けた地方の豪族の行動について、「微猷広く被らしめて、至徳魏々たり」、つまり、遠方から人がやってきて、しかもその命が助かったことは良い政治が広くこの国をおおい、天皇の徳が高きに至っていることを示すものだ、と天皇が述べられたというところと『続日本紀』養老二年（七一八）年十二月丙寅条にある、大赦に際して「広く至道を開き遙かに淳風を扇ぎて……」、つまり広くもつともよい道を示し、はるか遠くまで、正しく純朴な風俗を広めて、という元正女帝の詔から採用されたと推測されます。いずれも採用されてもおかしくない、非常によい案だ

と思いますね。

各社のコメントや、関連展示や書籍など、全てを把握できていませんが、発表されてもななく、国文学研究資料館が「令和」の時代」という展示をされ、そこにこれらの出典とされる古典を展示されました。また資料館のホームページには解説と書き下しもあり、大変参考になります。『万葉集』だけではなく、漢籍・国書ともに、このような機会に古典への関心が高まることを期待したいですね。

—— 同じ年号案でも出典を変える。そういうことなんですか。

久禮 そうです。かつてのやり方は年号勘文ねんごうかんもん（年号案とその典拠を示した調査報告書）を文章博士や式部大輔に提出させたものから、公卿による陣定（年号定）なんぢんの難陳（年号案の審議）を加える形になるわけです。そこで出典について色々議論する。それこそ、この水上先生の本（水上雅晴編・高田宗平編集協力『年号と東アジア 改元の思想と文化』八木書店、二〇一九年）にも書かれている通り、年号勘文に逸文として、中国ではもはや失われてしまった古典の断片が残っている。そのことが最近では、中国研究の方で評価されています。

中国漢文の研究者のお話を聞くと、中国漢文では中国が本家で周辺諸国はその受容というレベルではなくて、全体として漢文化圏というかたちで理解しているように思います。今漢文研究で一番注目を集めているのはベトナム漢文って言われて、ちょっと驚きました。

—— 八木書店の『年号と東アジア』には、ファムさんのベトナムの年号が収録されています（ファム・レ・フィ「ベトナムの年号史試論」）。『年号と東アジア』は学術的にもすごく良い本だと思います。

久禮 遠藤先生の論文があればなおよかったのですが……。

—— いや、こんな偉い方のなかで私なんか書かれへん。

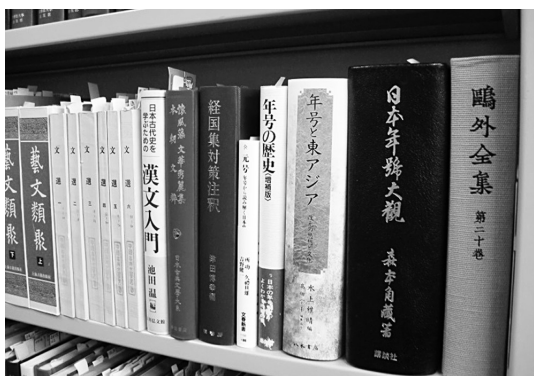
それにしてもこの本は、二〇一七年に佐倉の国立歴史民俗博物館で開催された特集展示「年号と朝廷」を紙上で再現されています。水上先生（水上雅晴、中央大学教授、中国哲学）がもともと年号勘文を研究されていて、大規模な科
本研究を組織され、二〇一七年十月に行なわれた歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」があつて、
この学術書に結実しているんですね。良い編集者もいて。当初は讓位（退位）が分かつていたわけではなく、改元な
ど全然わからない段階でスタートした研究が、時代が追いかけてきたもので、どんどん大きくなって……。

久禮 編集はね、恋塚さん（恋塚嘉、八木書店古書出版部）という明治大学出身の方が尽力されました。インタ－ネッ
トで六国史などのテキスト・データベースとかを公開していた方ですから。出版人と研究者ふたつの視点で学術出版
を進められた。

—— 二日にわたつて開催されたシンポジウムのときに、編集者の恋塚さんが参加されていて、「なんで編集者がこ
んな朝から晩まで聴いてくださるのかな」と思ったら、出版の企画を探っておられたようです。受け入れ側の高田宗
平さんと二人、阿吽の呼吸。われわれにとつて編集者つて、ほんとうに大切な存在ですね。

久禮 出版ということではいうなら、水上先生がされている年号勘文の研究は、それこそ中国で出さざるを得なかつた
のが（共編『日本漢籍珍稀文献集成（年号之部）』全5冊、上海社会科学院出版社、二〇一八年など）、僕ははつきり言つてす
ごく日本としては恥ずかしいことだと思えます。過去の日本人が作ってきた資料なのに、中国人の方が中国で出版さ
れて、日本がそれを輸入するつていうのは……、もちろん中国の方が本を安く出しやすいことは間違いなくあるんで
すけれども、ですから、もつとそういう研究がもつと進めばいいなと思うと同時に、その研究成果の出版が積極的
に行われるようになってほしいと思います。

ともかく、そういう漢籍に典拠のある年号案を年号勘文で出させて、難陳なんちんが行なわれる。そこでは出典についても



(年号に関する研究書籍)

議論がされるわけです。だから同じ年号を何回も出していても、その時ごとに典拠が違うっていうことはよくある。

——なるほどね、理解できました。

久禮 実際、「平成」なんかも、昔は『書経』で出していて（高辻修長が勘進、このときは「慶應」が採用）、昭和の後のときは『史記』を出典に加えています。それはなぜかという点、漢籍から年号を選ぶにしても、取れる場所はおおよそ決まっているわけです。たとえば歴史書だったとしても、『史記』の秦の始皇帝の事績から採ることは難しい。

——採れないんだ。まあそうでしょうね。

久禮 やっぱ短期間で滅んだ王朝で、「焚書坑儒」などのマイナスイメージがつきまとう皇帝だから良くないみたいなのがあつて。結局、採るとなれば三皇五帝（神話・伝説上の帝王）あたりから採るしかないわけです。

——漢籍が典拠になるといっても、限られたところなんです。

久禮 そうそう。三皇五帝か、（聖天子の）堯舜とかであつて、今の言い方でいうと歴史的評価が分かれる人の事績からは採れないところがある。だから出典は変わっても結局同じ人物の業績の文章からとつていて、表現も似通ってくるということがしばしばあります。

——私はそれが、国書とはいっても『日本書紀』から年号を採りづらいっ

てことになるんかあと思っていたんですけども。

久禮 あー、なるほど。

—— 『日本書紀』の五世紀史なんて、生々しいですもんね。でも中国の伝説の聖人であれば、「もうええやん」っていう。歴史的背景が消滅していて、汎用性があるから。

久禮 だいたいもう子孫は滅んでいきますから。日本の場合は皇室はじめ、過去の天皇の事績に関わった人々の子孫が長く続いているということもありますしね。

—— ある神社界の方が、「今回は『万葉集』で良かった。だけど、まだ漢文だった」とこぼしておられて……。

久禮 えー。

—— えーって感じでしょう。年号の典拠で国書へこだわることが、私よくわからなかった。

久禮 だったら何から採るんですかって話やから。『源氏物語』ですか？って。

—— 平仮名になるでしょう。

久禮 昔、高島俊男さん（高島俊男、中国文学者・エッセイスト）が、『源氏物語』の巻名からとったらどうかと提案されてますね。

—— 「早蕨元年」とか？

久禮 講演でいつもそれネタにするんですけど、「野分元年」とか台風しかないやろ、「浮舟」とかどこへ行くかわからんやろとか言うって。

実際、日本人の文学のなかに中国から表現を借りずに、こういう政治的な理想を書いたものがあるのかというところ、実はそんなないわけです。だから僕は、『万葉集』から選んだ「令和」は良い先例になったと評価するんです。あ

まり政治的ではないじゃないですか。

—— そうだと思えます。

久禮 なんとなくこう、フワツとした、人間関係や自然との調和を重んじる印象がありますよね。

—— スローガンを掲げて、そこに向かって走っていくのではない形だね。

久禮 僕は逆に良かったのかなと思うんですよ。もうそういう時代ではないから。今の世界情勢を見ても、スローガンをガンと言ったら、それに対して反発が起る時代になって、みんなものが言えなくなっているわけだから。

むしろゆるやかな文化的なニュアンスの元号を選んだのは、僕はこれからの時代には良い先例になったと思います。今後選ぶとしても、新たにもっと元号案を採れるところがあるんじゃないか。それこそね、唐詩からでも採れると思うんですよ。

—— 唐詩？

久禮 『白氏文集』とか、ああいうところから採れるのであれば、可能性は広がるんじゃないかと。実際、平成改元のとときに竹下さん（竹下登、内閣総理大臣）の執務室に突然行ったら、『唐詩選』を読んでいて、（昭和の次の元号は）唐詩から採るんじゃないかっていう……。

—— それでみんな、

久禮 ワツとなった。わざわざ竹下さんの恩師のところへ取材に行つて、「唐詩選を読んでたんですよ」って。「うーん、竹下くんはあんまり漢文も熱心じゃなかったから、もしかしたらそつから選ぶかもしれんね」みたいなコメントが当時出ていたらしいんですけど。でも、唐詩から年号を採る例はあまりないんで、（経書・史書ではなく）文学から採るっていうことは可能なんじゃないかっていうのでね。

もうひとつ言うと、「令和」の出典である『万葉集』の「序」に、更に出典がある、つまるところ中国古典のコピーじゃないかなんて議論も出ましたけれど。

—— 典拠だ。

久禮 だって過去の元号で『藝文類聚』げいぶんるいじゅう（唐代の類書、欧陽詢撰）から採ったのもあるんですよ。

*編者注：「元弘」（一一三二—一三四）、「貞和」（一一四五—一五〇）、「延享」（一七四四—一七八）など（森鷗外「元号考」『鷗外全集』二十による）。

—— 孫引き、学生でいえば Wikipedia からのレポートみたいな感じですよ。

久禮 そうそう。だからあんまりそういうこと（コピー／オリジナル）を追求するのは、あんまり意味がないんじゃないかなという気はするんです。まあでも、そういう議論は昔の難陳を思い出させるところがありますね。

明治以降になると、かつては難陳だったのが、「明治」は籤引きですけど、「大正」の時は総理の西園寺公望が元号勸進の内案を作らせて、そのあと枢密院が審議をして、新天皇（大正天皇）に裁可を仰いだ。「昭和」もそうですよ。それで「平成」のときには有識者懇談会と、衆参正副議長と、閣議を経ている。その点では、かつての年号定ねんごうまきめと似たようなかたちではあります。そもそも年号定や難陳についてはずっと批判があるんですよ。無駄だっていう。それはもう、藤原定家なんかはウジウジ言ってるわけで（『明月記』嘉禄元年四月二十一日条など）。

—— 鎌倉時代から言っている。

久禮 鎌倉から言ってるんですよ、無駄だと。あるいは藤原宗忠なんかは、行ったら集まりが悪かったとかね（『右記』元永元年四月三日条）。藤原実資は、道長が前日に決めているのに、わざわざもう一回年号定をやるっていうから、俺は行かなくていいじゃないかと言って欠席したりとか（『小右記』治安元年二月二日条）。年号定には結構批判もある

わけなんですよ。だから明治に入って岩倉具視の意見によって、廃止されたわけです。

—— ガチ（実質のある真剣討論）じゃないからですね。

久禮 ガチじゃないから。吉野健一さんに聞くと、どうも室町時代から年号定を真剣にやらなくなっていると。それ以前から形式化が進んでいたわけですが、室町時代以降の難陳は台本を決めてやっている。

—— 儀式化ですか。

久禮 そう。で、その前に下光（シタビカリ）っていつて、

—— シタビカリ？

久禮 下に光と書くらしいんですけど、吉野さんの研究によれば、いわば事前打ち合わせみたいなことをして。

—— だから、案件を本会議にかける前に、もめそうな議案は事前に議論して結論を出しておく、骨を抜いておく。

久禮 どこでも似たようなことはあると思いますけど……。どうも事前打ち合わせをやっている、それは年号の選定で足利義満にだいたい介入された反省から、「年号定の前に決めちゃおう」みたいなことではないかと、言われていたんですけどね。

ただ批判はあるけれども、難陳のようなことは、新年号から少しでも悪いニュアンスを排除するために必要な手続きだったと思います。藤原宗忠が（提示された年号案は）今流行の散楽法師と同じ名前だからダメだと言ったとかね。つまりはやりの芸能人と同じ名前の年号案は良くないみたいなのを言ったら、当時の上卿が「人から批判されるものができるだけ外した方がいいから」とその意見を採用した（『中右記』保安元年四月十日条）というのを見ると、（難陳は）一定の意味はあるんだろうと思います。できるだけ良い字を選ぼうという努力だったのでしょうか。

五、年号選定の課題

—— この有識者懇談会で選ぶ方式は、久禮先生、良いと思われます？

久禮 この方式は竹下さんが決めたらいいんですけど。実は元号法のときは、それ（有識者懇談会）をやるとは決まっていないのですよ。

—— 元号法はああいう短いものですか。

久禮 いや、元号法が制定された後に、閣議報告のかたちで公表された要綱ですね。「二文字でなければならぬ」とか、ああいうのを太平（正芳）内閣のときに作っているんですけど、そこには閣議と衆参正副議長の関与しか規定されていない。竹下内閣のもので、改元の直前になって有識者懇談会というものが設定されたようです。だからあれは竹下さんによるマスコミ対策だったのではないかと報道関係の方は言っていますね。事実、当時から民放連代表とNHK会長と日本新聞協会会長が入っていますよね。だから今回もそれは絶対入るだろうと予想されていました。

—— 報道する側が中（有識者懇談会）に入っている。

久禮 だから取材するほうもされるほうもやりにくかったと思うのですけどね。「有識者」というのは、年号に関する知識じゃなくて、一般常識の代表者ですから、必ずしも年号に詳しくなくてもいいと思うんです。

—— では、ほんとうに年号を決める、年号案を出すプロはどこに？

久禮 いわゆる発案者、考案者はマスコミ各社、特に毎日新聞がだいぶ追及しましたけど、とりまとめをしたのは国立公文書館公文書研究官の尼子昭彦先生と、その後任の方がそうだろうと言われています（「毎日新聞」平成三十一年

四月一日、毎日新聞「代わり」取材班編『令和改元の舞台裏』(毎日新聞出版)。まあ尼子先生は改元のほぼ一年前に亡くなられていますけど。そういう方々が、いわゆる学界の重鎮とされるような方々に依頼して、提出してもらったのをまとめて、内閣に行つて、そこからは政治的決定でしょうね。だから、我々の目に見えないところでやっていると考えた方がいいですよ。

——それがね、私、機関でノウハウが継承されていないと思うんですよ。
久禮 そうでしょうね。

——(改元が)三十年に一遍やつたら、たとえば宮内庁書陵部であるとか。公務として『皇室制度史料』を編纂されていて、そこには先輩後輩で継承される学問があるでしょう。みなさん第一線の研究者ですよ。元号制度を続けるのなら、菅原氏を作れといっているわけじゃないんですが、部局で、機関で継承した方が良いんじゃないでしょうか。
久禮 元号調査官みたいな。

——そう、そう。

久禮 でもそれはそこに取材が集中するのではないですか？。

——しかし機関であれば、それは組織としてシャット・アウトすることができるとは思うんですよ。仮に年号について「国書で選んで」というオーダーがあれば、書陵部の学問のなかにおられる方たちが組織のなかで検討されて、そこで候補を提示されるのが穏当ではないか。学術面でも、ノウハウの継承の面でも。

久禮 一時期の日本の学界は、教科書調査官とか、宮内庁書陵部とか、国立公文書館に対して、ちょっと批判的な人が多かったんじゃないですか。そういうところに行くのは結局、国家権力の手先になることだ、みたいなね。日文研(国際日本文化研究センター)もそういうふうに言われた時期もある。私はそういうのは良くなって、これはちゃんと

やっていたいだいでいるのだから、それに対して学問的に評価するべきだと思います。実際、それらのポストは現在ではある種の研究者のキャリアとして評価されるようになって、これは大変良いことだと思います。

そういうことを考えると、むしろある程度オープンにして、「この人は国に関わる漢文・古文の研究をやっている人です」という位置づけを与えていくことは、僕はあってもいいのかなという気はします。

—— 行政発掘と同じかな。それは万葉文化館もそうだと思うんですけどね。

久禮 それを「国家に対する学問の従属である」とするのは、あまり良くないと思うんです。

先ほども言いましたが、森鷗外が「大正」元号について批判しています。ベトナムの莫朝にあると（ベトナムの「大正」、一五三〇―四〇）。その後彼は、吉田増蔵（宮内省図書寮編修官、漢学者）を奈良女（奈良高等女子師範学校）から引き抜いて、自らの著作である『元號考』の補訂を依頼した。その彼が「昭和」元号を選んだ。結果的に言えば、そういうことを含めて引き抜かれたと考えるといいと思うんですよ。それってやっぱり重要なことで、批判するのはたやすいけれど、やっぱり次のことを考えて人々を養成しておく。養成といっても、吉田先生は元々業績のある人ですから、そういう人をしかるべきポジションにつけて自覚させる、「考えておいてくださいね」ということですよ、結局。

—— そうですね。

久禮 それはあっていい。それにふさわしい研究者は誰かを依頼することはあっていいと思うんです。例えば、尼子先生はね、これだけの大仕事を成し遂げられた、その学識と労力に比してあまりに報われていない。今回毎日新聞が言わなかったら、「あの人は一体何をしている人なんだ」って、みんなが分からなかった。いま報道のおかげで再評価されていますけど、目立つといけないからあまり論文も書けなかったそうですね。晩年に一回だけ国立公文書館で企画展をされて、陛下もいらっしやったらいいですけど。独身のまま亡くなられて、そのことも、元号考案に関わっ

た先生方も新聞記者が伝えるまで知らなかった。

—— 本当に学問に一生捧げた方なんですね。

久禮 だから本当にそういうことだけをやって来た人だと。本人はそれを一切言わなかった。

—— このご時世だと（そうした勤務の形態は）理解されない。まだ余裕があったのかな。

久禮 僕はやはりそういう人に対して、生きていくうちから報われて然るべきだと思うんですよ。使命感があつて務めておられることに対して、なんらかの形で報われるべきです。「昭和」元号を提出した吉田増蔵や「大正」元号を選んだ国府種徳（内閣嘱託、漢学者）は存命のうちから高い評価を受けていました。そういう点でいうと、「平成」も最終的に考案者が分からなくなっているという問題がありますね。まあ、ちょっとあのあたりはあやふやにしておかないといけないところがあるようですが……。

—— やっぱり年号を選ぶ人ってそういうことなのですね。ややこしい。

久禮 「令和」の場合、ほぼ中西進さんで決まりだと思われませんが、週刊誌が色々言うようになりましたからね。元号そのものの評価とは別に、個人のイメージがついてしまうことに対しては批判があると思うので、そうであれば人じゃなくて機関というのはいいいのかもしれないですね。

—— そう、研究機関、研究組織のほうがね。

久禮 そういうところが前もって（年号の草案作成を）やっておくというのは一案だと思います。

—— いいご意見をうかがえました。賛成です。

六、年号を支える人文学の将来

久禮 もう一つ言うと、これから将来、漢文研究者とか国文研究者がどんどん減っていきますから、下手をすると次の次くらいになると、「(年号は)誰が選ぶんや？」ってことになってくる可能性がある。

—— 平仮名・片仮名は、ちよつと考えたくない。海外発注とかも。大学の入試問題を予備校に作ってもらうみたいな。久禮 中国の大学に勤めている日本人研究者が選ぶこともありえるかもしれません。それはちよつとどうなんだ、となるわけで。前回は市古貞次先生(国文学研究資料館館長、中世文学)が選者だったじゃないですか。そうすると今、国文研の館長さんは、

—— なるほど、なるほど。キャンベルさん(ロバート・キャンベル、国文学研究資料館館長、近世・明治文学)。

久禮 そう、ロバート・キャンベルさん。

—— 先日皇學館にお見えになりましたね。

大島 ええ、本学の貴重資料のデジタル化について、国文研と皇學館大学との調印式がありました(三月六日)。

久禮 (年号を選ぶ人として)キャンベル先生の可能性あるなと思ったんです。ただ、キャンベル先生、結構元号関係のテレビ出てるんで。

—— (テレビに)出る人は(選者の候補には)出ないでしょうね。

久禮 そうですね。だから違うと思っただけです。キャンベル先生はいいと思うんです。将来、青い眼の選者が出る可能性もあると思うのですよ。あるいは金文京先生(京都大学名誉教授、中国文学)のように韓国・中国にルーツを

もつ選者の可能性も出てくる。それはそれでいいと思うんですけど、ただ、キャンベル先生のような方であった場合、アメリカの大学で日本文学を研究した人が、日本に来てポストを得て、そして日本の元号を選ぶっていうことになる。日本の大学とかアカデミズムにとってそれで良いのかという危機感をやっぱり持たないといけないと思うんですね。元号について知見のある研究者を一定数プールしないといけない。

瀧川政次郎先生が「賢僧一人に愚僧千人」っていう言い方をするんですね。

——（笑）、つまり？

久禮 賢いお坊さんを一人出すには、愚かな僧が千人おらんとあかんっていう。

—— 質は量が担保する。だから裾野を広げなければいけない、と。

久禮 喩えとしては良くないけど、瀧川先生の言っていることは確かで、ある程度研究者をプールしておかないと、集中的にこの人だけ、みたいな感じになってしまうと、それは良くないと。

—— そうそう、それは良くない。名人芸では、後が続かないから。

久禮 学問、少なくとも人文学において「選択と集中」は意味がありません。だから私立の大学、たとえば皇學館大学などはまさにその典型で、「うちはずっと国文・国史をやっています」みたいなところがあるから、旧帝大系も緊張が出るわけじゃないですか。そういう学問的な緊張を維持していかないと、それこそ次の世代、次の次の世代となっていくたときに、どこかの段階で日本に元号を選ぶ人がいなくなってしまう。

—— ありえない話ではない。

久禮 過去の場合だと、菅原氏はそういうことを蓄積しているわけですよ。広橋家（藤原氏北家日野流）とか。前の展示（歴博の特集展示「年号と朝廷」）でも何らかの事情で新しい年号案が思いつかなくても、ここから選べるように

年号案を蓄積していた、そういう史料が出ていました。

—— 一月に東京・上野へ「顔真卿展」をみにいきましたら、『尚書』の写本が展示されていて、その裏が『元秘抄』、つまり年号選定のマニユアルでしたよ（『古文尚書』巻第六、東京国立博物館）。表は七世紀の唐鈔本で、年号の典拠になる『尚書』。裏は菅原氏の高辻長成たかつしながなり、前半でお話に出た最多年号勘進者である菅原為長の子が著した『元秘抄』でした。表裏一体で使ったマニユアルでしょうね。

久禮 そう、マニユアルを作り、そして年号案をプールしておく。ここから選べみたい。それは家だからそうなりますけど、将来は誰が、どう選ぶかを常に考えていたわけです。

—— くりかえしますが、それが機関であればね。

久禮 ベストだというよう。それは決して学問の国家への従属とかいうことではないと思うんですけどね。ある意味で国家の学問への社会的な役割じゃないのかなという気がします。もちろん、政府のいうことにただ追従するのではなくて、時として学問的立場から警告したり諫めたりすること、これも重要だと思いますが。

—— だいぶ変わってきましたけど。でもまだ……。

七、古典としての『万葉集』

久禮 ところで、品田悦一さん（東京大学教授、日本古代文学）の『万葉集の発明』（新曜社、二〇〇一年。二〇一九年に新装版刊行）について、大島先生にお話を聞きたいんですけど。

大島 私あんまり詳しくありません。

—— 品田先生による『万葉集』の見方と、五月一日の「日本経済新聞」に書いておられた上野先生の『万葉集』の見方が正反对で、そんな議論があるのは健全なことだと思います。同じ万葉研究者でこんなに違うと、面白いなあと思つて。

大島 まあ、上野さんはわかりやすく一般向きに書かれているところはあると思いますね。

—— 「日経」の記事の見出しは「天皇・民 和歌が結んだ絆」、いわば君臣の調和としての『万葉集』像です。一方で品田先生のご本の副題は「国民国家の文化装置としての古典」ですから。

大島 それぞれの視点で書かれているのですが、私、品田さんのコメントはしづらいです。（参考「朝日新聞」四月十六日に、「万葉集、「愛国」利用の歴史「令和」の典拠、歓迎ムードに警鐘」という記事も。）

久禮 ある一定の段階でこういう研究が一時期すごく流行ったじゃないですか、国文学の中で。たとえば、『源氏物語』を古典とするのは定家が決めたこととか、『万葉集』に脚光が当たったのは近代国家でとか。だいたい藤原定家と本居宣長と近代国家が悪者にされがちなんですけれども、まあでもそれはそれで『万葉集』や『源氏物語』が完全無欠の古典ではないということを指摘する点では良かったと思うんですよ。

—— うん。面白い。

久禮 面白い指摘ではあるんですよ。やっぱり『万葉集』や『源氏物語』が持っているいろいろな可能性を引き出した。いわばそういう『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』がすごい古典で、そのほかはちよつとランクが下がるというのではなくて、そういうランクづけは必ずしも文学的内容によるものではないから、他に『金槐和歌集』もあれば、いろいろよい内容の歌集があるっていう、それこそ折口信夫は『新古今』じゃなくて『玉葉集』・『風雅集』の方が良いみたいなことを言っていたのですね。で、そういう点では私は、古典では『万葉集』、古典では『源氏物語』

という評価はあくまでも近代国家のイメージですよと、そうじゃないのもありましたよ、という意味はあったと思うのです。(指差し機能) っていうんですかね。

—— 指差し機能？

久禮 「ここに問題がありますよ」と指し示す意味があると思うんですよ。でもね、わかりました、と。これを古典と決めたのは近代国家なんですね。では新たにその思い込みを外した時に『万葉集』はどう読めるんですか、と。

—— あー、そういうことね。久禮先生はその次を求められる。

久禮 それ以上のことは言っていないじゃないですか、問題点だけですよね、ってことになると思います。

—— (困惑して) また文学の人がいえないことを……。ちよつとまあ原稿にしているから、またご覧いただくとして、

大島 だから、あれですよね、『万葉集』といえば、教科書的に理解するのはどうかというふうなね。でも、教科書的理解で合っている面も当然あるわけで、まあ品田さんのはかなり強烈でしたけどね。

久禮 実際、『古今和歌集』には防人が、あの時代にはいないからですけど出てこないじゃないですか。歌を詠んでいる階層を比べれば、『古今集』より『万葉集』の方が広いことは事実なわけなので。それと後に国民国家としての日本のなかで『万葉集』が評価されたということはまた違う問題なのではないかと思えます。

—— 近代の問題と『万葉集』そのものの問題、そこが大事なことなんだ。

久禮 実際、『万葉集』は、いわば前近代にそれほど評価されなかった、土臭さが見えるだろうというのも、これも分かってはならない。しかしそれと『万葉集』そのものが持つてくる意味はまた別なんじゃないのかな。安倍さんの談話で「我が国の豊かな国民文化と長い伝統を象徴する国書であります」を聞いて、絶対品田さんが批判されるだろうなと予想はできました。そういう国が示す古典の解釈に対して、ちよつと別の視点を提示するという意味はあったと思

います。

大島 ああ。

—— 『短歌研究』で書いておられましたよね。長屋王の変についても触れておられました。

久禮 僕はあれにも言いたいことがあって。北山茂夫先生（立命館大学教授、日本古代史。一九八四年没）が言っていることとそんなに変わらないですよ。

—— （さらに困惑しながら）万葉学者の前で、いいんですか。

久禮 品田さんのあの考え方、長屋王の変は藤原氏の陰謀だなんてね、今はいわば古代史の人間はほぼ批判的じゃないですか。長屋王の子どものなかで、吉備内親王との間の子どもだけが殺されているのかを考えれば、あれは聖武天皇との関係——皇位継承の問題だということは、（古代史研究者の間では）ある程度共通理解じゃないですか。それを全然こう、アップ・デートしてませんよねっていう。

—— 一般受けはするんですよ、多分。我々でのアップ・デートと一般では時差があるし。

久禮 そういう点でいうと、かつて存在したような『万葉集』を論じる国文学と歴史学で、長屋王の変みたいなものの理解で『万葉集』を理解したらどうなるんですか、みたいな議論が最近はされていないのかな、と思いました。私が見られないだけかもしれませんが。

例えば上代文学会や中世文学会は毎回シンポジウムで歴史学者を呼んで、いろいろ勉強になるところも多いのですが、「古代史研究で今こうなっています」っていう、「じゃあそれで『万葉集』を読み返したらどうなりますか」というところまで議論が進んでない気がしますね。

—— お互いの領域でその分野を代表できるような碩学が少なくなっていることがあると思うんですね。

久禮 今回のことで露呈したのは、万葉を語れる歴史学者もいないし、歴史を語れる万葉学者もいなくて、みんな「この人やつたら言いそうやな」っていうことをみんな言っている。そこは若干心配になったところではあるんですけど。

—— 久禮さんいったいおいくつなんですか？。学界の将来を憂いてらっしゃるじゃないですか。

久禮 カットしてください。こんな偉そうに。

—— いや、偉そうじゃなくて、それだけ責任が重くなってきているのだなあと。

久禮 そういうことも含めて、各種のコメント見ていると少し不安を感じましたね。で、実際、前の時には坂本先生とか小島先生みたいな歴史も国文もできる、広い意味での国書を扱える人がいて、中西先生もいわばその流れの一人なんですよ。

—— そうそう、今回は。どなたもまあ異論はない。

久禮 ちょっとこれもなんかの番組で言ったけど使われなかったのは、中西先生だけが、日中文化に広い見識があるみたいに言われているけれど（著書に『万葉集の比較文学的研究』桜楓社）、例えば石川忠久先生は中国文学がご専門ですが、大正天皇の漢詩を研究されているし（『大正天皇漢詩集』大修館書店）、池田温先生は日中比較律令論で大変な業績をお持ちですよ。

—— ご著書の題が『東アジア文化交流史』（吉川弘文館）。

久禮 だからそういう点でいうと、元号の選者だと報道されている人はみんな日中に広い視野を持っていて、かつ国文とか広い意味での文化も、政治も語れる人が選ばれています。その点でいうと、中西先生だけが特殊なわけではない、みたいなことを打ち合わせでは言ったんですけど、使われなかったんですよ。

—— 演出に合わせて刈り込まれてしまったのかな。

久禮 そういう人たち（スケールの大きな研究者）がこれから出てくるだろうか、という疑問が残ります。どうしても学問が業績加点主義で。

—— 細かいのになってしまっている。分野も棲み分けられていてね。

久禮 なんといいんですかね、シンポジウムをやってもお行儀よくこう。

—— 殴りあいにはならないところがあるのですね。主催する側としてはもちろんそっちのほうが良いですけど。

久禮 喧嘩してもらったら困るんですけど、昔の歴史とか国文のシンポジウムだと、結構みんなキツイやりとりをしていますね。

歴史の人間と国文の人間がこうワーってやる状況が昔に比べるとあんまりなくなっているのかなって気はします。昔は松本清張が司会しているシンポジウムなどでは、国史も国文も、アカデミズムも在野もなく、お互いの専門に敬意を示しながら、でも激しい議論をしていますよね。ああいう雰囲気の中で、いわば鍛えられてきた人が大学者になつていくと思うんですけど。まあちょっと、いまはないのかなっていうね。

大島 梶川信行さん（日本大学教授、国文学）が、『おかしいぞ！国語教科書―古すぎる万葉集の読み方―』（笠間書院、二〇一六年）の編者で、『万葉集』のね、国語教科書におけるとりあげかたがおかしいんじゃないかって。だから、いままでみたいな理解とは違う、万葉研究も進んでいますよってことをいっている本ですね。

—— 学会と教科書も時差がありますし、学問領域ごとでも時差があるってことですね。

久禮 逆に、教科書調査官の人が、『ここまで変わった日本史教科書』（吉川弘文館、二〇一六年）を書かれています、あれもなかなか良い本です。しかし、そういう試みがあるにせよ、他の分野に対して現在の研究状況を聞いてもらうみたいな機会や、そういう役割を担う人は、これからどんどん減っていくかもしれない。



(澤瀉久孝博士旧蔵書、皇學館大学附属図書館澤瀉文庫)

—— 学界としてそういう人を育てていく仕組みも必要なのかな。

久禮 戻りますが、『万葉集の発明』はどうですか？。議論としては、万葉学者の人はみんな多かれ少なかれ、そんなことは考えていた内容だと思っただけで、どうなんでしょう？。

大島 そうですね、私なんかあんまりそういうことろに心がなかつたもので、正直、そういう面もあるのかなって感じでしたけど。私なんかもう、澤瀉博士（澤瀉久孝、京都大学名誉教授・皇學館大学教授、国文学者）以来の、ああいう。

—— 訓詁注釈。

大島 ええ、訓詁注釈でやってますんでね。

—— 歴史で言ったら聖徳太子をめぐる議論のような感じなんですかね。

久禮 そうだと思います。同じですよ、学問としては。

—— 研究者内では分かっていたことを、一般の人たちに対して、もう少し鮮烈な形で届くようにした。

久禮 そうです。聖徳太子がやったとされていることは、全

部聖徳太子がやったわけじゃないですよというのを、ざっくり言うと「聖徳太子はいなかった」となる。『日本書紀』に書いてある大化の改新でやったことは全部本当じゃないですよっていうのを、ざっくり言うと「大化の改新はなかった」ってなる。『万葉集』は必ずしもずっと古典とされていたわけではないですよというのをざっくりいうと、「万葉集が古典とされたのは近代です」となる。それは一般書としてはそれでいいと思います。

大学の授業でこういう話をするときに言うんですけど、聖徳太子非存在論とか大化改新非事実論って、今完全になかったことにされていて、メインの学者がもう扱わなくなっていますけど、その議論によって結果的に聖徳太子の研究とか、大化の改新の研究が精緻になったことは確かじゃないですか。みんな一回ゼロベースで考えてみようっていう点では、僕は意義があったと思うんですよ。

—— うん、うん。

久禮 問題は批判に対して再批判しても噛み合わないみたいになっていくところが良くないと思うんですね。でも、ある一定の意義があったと思うんですよ。品田さんの議論の場合、そうやったことによって何が変わりましたかって。『万葉集』の読み方として何が深まりましたかっていうところを、もう少し議論しないと。何かこう露悪主義っていうんですかね。

平泉澄先生が田中卓先生へのお手紙に「未だ曾て嘘をいひし事なし。……いらぬ暴露は之をいたさざるのみに候」と書かれていたそうです（田中卓『平泉史学と皇国史観』青々出版、二〇〇〇）。それは前にお話しした学問の社会的な役割と関わってくると思うんですけど、分かっているけど、それを露悪的に「こんなもんは作られたもんだ」と言うことによつて、それで史料や作品の読みが深まるならよいですが、そうならないのならばだまっていたほうがよいと思います。

八、元号の取材・報道をふりかえって

—— さて、およそ予定していた論点は、お二人の先生に触れていただいたかと思えます。国書といいながらその後にある漢文脈について、有識者懇談会による年号の選定方法について。そのほかとなりますと、未採用年号案が漏れるとか、あるいは年号についての今回の報道のあり方とかで、先生方なにかご意見やご感想などおありですか？

大島 私なんて素人ですけど、漏れているというよりは、故意に流しているんじゃないのかなと思いました。やっぱり情報公開といえますか、結果的に答えた形なのかなと思って。報道では「明らかになりました」とか言いますけれど、NHKとかでも報道していますから。

久禮 翌日の朝には未採用年号がもうほぼ出ていたじゃないですか。「ニュース9」（「ニュースウォッチ9」、NHK、平日二一時～二時）で解説させられました。

大島 ほー。

久禮 出典はこれこれで、とか、ある程度説明させられました。

—— それも（電話が）掛かってくるんでしょ？、テレビ局から。

久禮 それが恐ろしいことに、四月二日の朝に日本テレビとテレビ朝日の番組に出て、新幹線乗って、京都産業大学はその日に入学式だったんですよ。私は入学式は出なくてもいいけど、入寮式は出ないといけないんです。

—— ああ、寮があるんですか。

久禮 京産に寮があるんです。一年だけの寮が（追分寮・葵寮）。

—— なんか、どこかの大学と一緒にの……。

久禮 僕、その委員だから入寮式は出席しないといけない。

—— それもどこかの大学と一緒にですね。

久禮 それ（入寮式）に出ないといけないから、「朝には新幹線乗りますよ」って、新幹線に乗ってたらNHKから電話掛かってきて、「（未採用年号が）全部わかりました」と。

（久禮）「ZIPとワイドスクラシブル出たあと新幹線に乗っています。もうすぐ新横浜です」って答えたら、（NHKの記者は）「新横浜ですか」って、ちよつと考えるんですよ。で、私が「大学に用事ありますから」っていうと、「あー、じゃあまた電話いたします」って言ってる。夜に改めて電話がありました。あれもし、大学の仕事がない状態で新幹線に乗っていたら、新横浜で降りて戻ってこいっていうつもりだったんでしょね。

久禮 なんかそういう感じで、（未採用年号案についても）もう全部ある程度調べて、出典はこれでという解説をやらされました。そこで分かったこともあるんで、まあよかったとは思うんですけど。

—— いきなり電話一本で聞こうとするでしょう。なんか学生でもそんなことしないのに。

久禮 そうそう。それでいうと電話取材はなにも出ませんからね。もちろん報酬の問題じゃないんですけど。

—— ちよつと電話取材はやめてほしいなあ。

久禮 ラジオ局で目覚まし時計を送ってきてくれたところがありましたよ。もうそれだけですからね。

大島 もう突然電話掛かってきて、「言ってくれ」みたいな感じなんですか？

久禮 元号発表の日については、「前から電話します」って言われていました。で、僕は午前中日テレで、午後はNHKだから、その移動時間の三〇分くらい。

—— 凄いなあ。

久禮 この時間に掛けてきてくれと。この時間だったら答えられると。この間で4局くらい。同じことを言わされるから、NHKに出たらもう話すことが決まってる。その間に頭を整理できますからよかったです。

—— ゼミで事前発表を重ねて、外部の研究会で報告に臨むみたいなものですかね。

久禮 そうそう、一〇分くらいで手際よく話さないといけないから。だからね、なかなかしんどかったのは四月一日ですね。でも中（報道機関の内部）でやっているのを見ると、結構、中の人達は真剣にやっているんですよ。報道の人たちは。

—— ああ、報道の現場の人たちですね。

久禮 少なくとも、日本テレビとNHKに関して言うと、かなり前から所先生や私に声をかけて、しっかり準備していたんですよ。ちゃんと下調べをして、出せないところでもある程度調べておくことをやっぱりやっている。毎日新聞社の平成改元のときの本（毎日新聞政治部『ドキュメント新元号 平成』角川書店、一九八九）にも、スクープとしていち早く報道することに意味があると考えられがちだけど、そうじゃなくて、それを含めて、その制度全体を理解して報道することに意味があるんだということを書いてあるんですよ。ジャーナリストの中にも、久能靖さんのように、前の代替わりの時から取材されている方もいらっしやいます。だから、マスコミの良心的な人はそのように考えているはずで、僕はそれをあんまり批判したくない。やっぱり、彼らは彼らなりに一生懸命にやっていて、良質な情報を伝えようと努力はしているとは思うので、そういう点では僕、「電話一本で聞くなあ」とか思わんでもないですけど……。

—— ああ、やっぱり心が広いなあ。

久禮 それから所先生がよくおっしゃっていて、僕もよく聞かされるのは、我々の研究してきたこと、考えていることをいわば拡声器として伝えてくれるわけですから、それに対して我々がどのように向き合うかが大事だと。「報道機関も人なんだ」と。「とんでもない人もいれば良い人もいるから、我々も人としてそれに向き合って、誠実にしていくことが大事ですよ」と言われて、僕もできるだけ向こうの「こういうふうにしたいですよね」との要望は、酌み取る形で対応させていただいているんです。まあおかげさまで、今のところ、そんなにめっちゃくちゃ不快な気持ちになったことはない。

—— 人間として向き合うのは大事ですね。

久禮 ただ未採用年号の最初の報道を見ると、どう見ても『古事記』ではないかというのを、『日本書紀』と言っている。いたりする。

—— 時間が経つにつれて、そこはちゃんと修正されてきて。

久禮 ということは、漏らした人間があんまり分からないで漏らしてるなって。

—— つまり『古事記』と『日本書紀』の区別がついていなかった。そもそも『日本書紀』に序文はありませんよ。大島 そういうことですね。

久禮 もう一つ、今回の「令和」改元の問題はやはり、一か月前の公表と、現在の上皇陛下がその政令に署名されたということですね。皇位継承と改元をきっちり合わせるという点では議論を呼ぶ内容でした。ただ、それをやると長くなるので。

—— これは大きな問題ですから、またの機会に。ここの博物館での特別展（即位礼と大嘗祭）もありますから。久禮 ちょっと最後に少しだけ、私ばかり喋ってますけど。

—— どうぞどうぞ。

久禮（梅花の歌三十二首并せて序）に影響を与えた）「蘭亭序」の王羲之と「帰田賦」の張衡は、どちらも南朝文学な
んですよ。

—— そうですね。王羲之は東晋。張衡は後漢ですが、「帰田賦」は梁の『文選』に収録されていますから。

久禮 それをどういうふうに考えるべきか、というところがあつて。つまり、日本の奈良時代の人が、江南の文学（南朝文学）を積極的に導入していると考えられるべきなのか。そもそも北朝は影響を与えるほどの文学が無いレベルだったのか。それこそ隋の煬帝はね、江南で死んでいるじゃないですか。南ばかり行っているから反乱を起こされたわけです。唐の太宗は王羲之『蘭亭序』が欲しい欲しいって言って、お坊さんが持っているのを南朝の皇族の生き残りに命じてだまして取り上げたとか。なんか（北朝の系列である）隋や唐は国家的には南朝を征服したけれども、文化的にいうと結局は南朝に征服されているところがあるので、その点でいうと、むしろ万葉研究の方に聞きたいんですね。南朝文学みたいなものを旅人が積極的に取り入れることがどういう意味があるのか。

長屋王もそうですけど、（奈良時代の文化人は）みんな南朝文学に憧れを持っていて、そこには、古墳時代以来の江南地域との関係みたいなものがあるのか。そのあたりのことは北條勝貴さん（上智大学教授、日本古代思想史）が指摘していたと思います。あるいは、その当時の中国の流行が一貫して南朝文化なのか。佐藤全敏さん（東京女子大学教授、日本古代史）が書かれていますけど、藤原道長の時代に買われている書物は『文選』と『白氏文集』の注釈書くらいしかない。同時代の宋の漢詩って買わないんですって。だから、商人が持ってこなくなつて、結局は『文選』と『白氏文集』ばかり読んでいる。それは佐藤全敏さん曰く「国風だ」って言っているんですよ。つまり、そこにセレクションが存在している。

—— そうそう、選択をしている。

久禮 だから「国風文化」というのは、宋の時代になっていのに、唐以前の文学ばかり使って、そこに和風が組み合わさっていると、佐藤さんは言っている。でも『文選』を読んでいて、日本の和風文学を組み合わせていることを考えると、旅人の段階から変わっていないことになる。そうであれば「国風文化」ってほんとに平安時代からなんですか？となるように思います。

—— おっしゃるのように、古代史の分野では「国風文化」の再検討が進んでいますからね。

久禮 その（国風文化の）淵源が菅原道真による遣唐使の停止であるということは、学問的には完全に否定されているので、むしろ『万葉集』の段階で大伴旅人みたいに漢文脈と和文脈とを組み合わせるあり方が発生しているということでは、「国風文化」の淵源は大伴旅人にあると言ってもよい。そしてそこから新しい年号「令和」が選ばれていることは、大きな意義があることだと思うのです。改めて旅人の作品や、国書の出典論を踏まえてテキストを読んでいくことの必要性が出てきた。王羲之を読んで、「梅花の歌三十二首并せて序」を詠作することが、当時の日本においてどういう意味があつたのかを考えなくてはいけない。

つまり（奈良時代は）国家としては北方の屯田制などの発展形である均田制と、貴族制と科挙制が組み合わさって存在している官僚制によって成立している律令制で動いているけれど、そこで動いている人たちは（南朝の）江南文学を読んでいる。そのあり方って、ちょっと面白いんですね。なぜかといえば、江南文学を生んだ南朝って地方分権じゃないですか。

—— うーん。

久禮 地方分権っていうか、バラバラで中央集権的なことが上手くいかなくて、結局南朝は滅びるので。そういうの

を旅人とか、長屋王とか、いわゆる壬申の乱以前のからの文化を維持したり、あるいは高市皇子につながる人たちが……、何といえはいいんでしょかね、ある種分権的な、あちこちに宮（皇子宮）があることの流れを汲んでいる人たち。だって長屋王の経済基盤って、仁藤敦史さん（国立歴史民俗博物館教授、日本古代史）がいうように上宮王家とか御名人部とかの伝統（王族が所領・集団などを擁し、独自の経営基盤を営むありかた）を汲んだものじゃないですか。

—— はい、はい。

久禮 大伴旅人もおそらくそうで、大化前代からの流れを汲む、そういう人たちがみんな江南文学を重んじている。で、それに対して聖武天皇や称徳天皇が中国北方の律令制とかあるいは大仏などに象徴される北方仏教の流れを汲む政策を行っていく。

—— ほう、そういう理解なのか。

久禮 大仏を造営することを考えたときに——これは榎村さん（榎村寛之、齋宮歴史博物館、日本古代史）も言われていることだと思うんですけど——、長屋王とか大伴旅人とかの文学と、それに相対した聖武天皇や称徳天皇がつくった国家と寺院との関係はどういうものなのか。こう考えると面白いなって。そうすれば歴史と文学とが手を携えた新しい地平が見えてくる。誰かやってくれないかなって。

—— それは言うた人がやらんといかん。

久禮 宮とか経済的拠点の話も入ってくるし、文学の話もできる。改元で改めて『万葉集』に注目が集まるのはよい機会なんで、いわばステージとして奈良・万葉の世界を拠点とした人文学の総合研究ができると良いと思うんですけどね。

—— 素晴らしいですね。だからまあ国書、国書って言っても、みなさんは何をもって国書と思っているのかなど。

そこが私の一番大きな違和感だったので、今日、お二人のお話をうかがって腑に落ちました。

久禮　なんかね、もう中国と日本が「うちがオリジナルだ」って、饅頭の本家争いみたいなことをすることになんの意味もない。

—— 数あるなかでそれを選びとっている、それを学び続けてきた、そこが値打ちだと思います。

久禮　その餡子はうちが持ってきたやつやとか、皮はうちやとかね、そんなこと言っちゃって生産的じゃないと思うので。

—— いやなんか、すごい時間になってきた。すみません、長時間に及んでとても盛りあがって、用意したのもも全て終わって、意義ある座談会になったと思います。お二人の先生に感謝いたします。

安垣さんと一緒に頑張って原稿にしますので、またご覧いただいて『皇學館論叢』に掲載したいと思えます。本日はどうもありがとうございます。

座談会・新元号「令和」をめぐる（大島・久禮）



（令和元年五月十日、皇學館大学佐川記念神道博物館館長室にて）